

基本計画書

基本計画										
事項	記入欄							備考		
計画の区分	学部の設置									
フリガナ者	ガッポホカゾン ニホンフクシダイク 学校法人 日本福祉大学									
フリガナ名称	ニホンフクシダイク 日本福祉大学 (Nihon Fukushi University)									
大学本部の位置	愛知県知多郡美浜町大字奥田字会下前35番6									
大学の目的	日本福祉大学は教育基本法と建学の精神「この悩める時代の苦難に身をもって当たり大慈悲心大友愛心を身に負うて社会の革新と進歩のために挺身する志の人を輩出する」に則り、教育標語「万人の福祉のために真実と慈愛と献身を」のもと、人間および社会に関する諸科学を総合的に教授研究し、高潔なる人格と豊かなる思想感情を培い、社会にとって有為な専門家であり、かつ地域社会に貢献できる人材を養成することを目的とし、広く人類社会の発展に寄与することを使命とする。									
新設学部等の目的	スポーツ科学部はすべての人々（国民）が生涯にわたって、健康であることを土台とした文化的な生活、活力ある生活、等しく生きがいを持った生活を営む共生社会を構築するために、文化としてのスポーツを多角的視点（人文・社会・自然科学等）から理解し、学校、地域、その他の場で、真摯に人と向き合い、よりよい関係を作り、スポーツの指導力、企画力、組織力、問題解決能力を持って実践にあたることのできる人材の養成を目的とする。									
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地		
	スポーツ科学部 [Faculty of Sport Sciences] スポーツ科学科 [Department of Sport Sciences] 計	年	人	年次人	人	学士(スポーツ科学)	平成29年4月 第1年次	愛知県知多郡美浜町大字奥田字会下前35番6		
同一設置者内における変更状況 (定員の移行, 名称の変更等)		1. 入学定員の変更 日本福祉大学 社会福祉学部社会福祉学科〔定員減〕(△90)(平成29年4月) ※収容定員の変更に係る学則変更の届出予定								
教育課程	新設学部等の名称		開設する授業科目の総数				卒業要件単位数			
			講義	演習	実習	計				
		105 科目	59 科目	5 科目	169 科目	124 単位				
教員組織の概要	学部等の名称			専任教員等					兼任教員等	
				教授	准教授	講師	助教	計	助手	
	新設分	スポーツ科学部 スポーツ科学科		人	人	人	人	人	人	人
		10	5	0	8	23	-	64		
		(8)	(4)	(0)	(8)	(20)	(-)	(33)		
		計	10	5	0	8	23	-	64	
		(8)	(4)	(0)	(8)	(20)	(-)	(33)		

	学部等の名称		専任教員等					兼任 教員等	
			教授	准教授	講師	助教	計		助手
教員組織の概要	既設分	社会福祉学部 社会福祉学科	23 (24)	14 (15)	0 (0)	10 (10)	47 (49)	- (-)	119 (119)
		経済学部 経済学科	10 (11)	7 (7)	0 (0)	0 (0)	17 (18)	- (-)	47 (47)
		健康科学部 リハビリテーション学科 理学療法専攻	4 (4)	3 (3)	0 (0)	2 (2)	9 (9)	- (-)	44 (44)
		健康科学部 リハビリテーション学科 作業療法専攻	4 (5)	1 (1)	0 (0)	5 (5)	10 (11)	- (-)	36 (36)
		健康科学部 リハビリテーション学科 介護学専攻	4 (4)	5 (5)	0 (0)	1 (1)	10 (10)	- (-)	30 (30)
		健康科学部 福祉工学科	6 (7)	2 (2)	0 (0)	3 (3)	11 (12)	- (-)	25 (25)
		子ども発達学部 子ども発達学科	10 (17)	8 (8)	0 (0)	1 (1)	19 (26)	- (-)	39 (39)
		子ども発達学部 心理臨床学科	5 (5)	8 (9)	0 (0)	1 (1)	14 (15)	- (-)	28 (28)
		国際福祉開発学部 国際福祉開発学科	6 (6)	4 (4)	0 (0)	1 (1)	11 (11)	- (-)	16 (16)
		看護学部 看護学科	8 (8)	9 (9)	0 (0)	11 (11)	28 (28)	- (-)	52 (33)
		福祉経営学部 医療・福祉マネジメント学科 (通信教育)	12 (12)	4 (4)	0 (0)	20 (20)	36 (36)	- (-)	79 (79)
		全学教育センター	3 (4)	0 (0)	0 (0)	2 (2)	5 (6)	- (-)	5 (5)
		スポーツ科学センター	0 (0)	0 (0)	0 (0)	3 (3)	3 (3)	- (-)	0 (0)
			計	95 (107)	65 (67)	0 (0)	60 (57)	220 (231)	- (-)
	合計	105 (115)	70 (71)	0 (0)	68 (65)	243 (251)	- (-)	584 (534)	
教員以外の職員の概要	職種		専任		兼任		計		
	事務職員		106人 (105)		23人 (22)		129人 (127)		
	技術職員		0 (0)		0 (0)		0 (0)		
	図書館専門職員		3 (3)		0 (0)		3 (3)		
	その他の職員		0 (0)		0 (0)		0 (0)		
	計		109 (108)		23 (22)		131 (130)		
校地等	区分		専用	共用	共用する他の学校等の専用		計		
	校舎敷地		175,697.85 m ²	0 m ²	0 m ²		175,697.85 m ²		
	運動場用地		58,263.63 m ²	0 m ²	0 m ²		58,263.63 m ²		
	小計		233,961.48 m ²	0 m ²	0 m ²		233,961.48 m ²		
	その他		35,812 m ²	0 m ²	0 m ²		35,812 m ²		
	合計		269,773.16 m ²	0 m ²	0 m ²		269,773.16 m ²		
校舎		専用	共用	共用する他の学校等の専用		計			
		78,969.04 m ² (78,969.04 m ²)	0 m ² (0 m ²)	0 m ² (0 m ²)		78,969.04 m ² (78,969.04 m ²)			
教室等	講義室		演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設			
	133室		151室	105室	13室 (補助職員 30人)	0室 (補助職員 0人)			
専任教員研究室		新設学部等の名称			室数				
		スポーツ科学部 スポーツ科学科			18室				
図書・設備	新設学部等の名称		図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	大学全体での共用分 図書 544,313冊 〔111,673冊〕 学術雑誌 4,564種 〔1,048種〕 電子ジャーナル 8,133種 〔6,424種〕
	スポーツ科学部 スポーツ科学科		8,771 [714] (7,171 [514])	170 [49] (170 [49])	3,293 [2,675] (3,293 [2,675])	392 (302)	217 (217)	1 (1)	
	計		8,771 [714] (7,171 [514])	170 [49] (170 [49])	3,293 [2,675] (3,293 [2,675])	392 (302)	217 (217)	1 (1)	

図書館		面積		閲覧座席数		取 納 可 能 冊 数				
		5,184.56 m ²		902 席		788,625 冊				
体育館		面積		体育館以外のスポーツ施設の概要				大学全体		
		3,718.29m ²		球技場、野球場、アーチェリー場、屋内練習場、武道場、プール（1施設）、トレーニング室（1施設）、テニスコート（4面＋2面）						
経費の見積り及び維持方法の概要	経費の見積り	区 分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	※図書費には電子ジャーナル・データベースの整備費（運用コスト含む）を含む。
		教員1人当り研究費等		550千円	550千円	550千円	550千円			
		共同研究費等		2,500千円	2,500千円	2,500千円	2,500千円			
		図書購入費	9,710千円	5,350千円	5,190千円	0千円	0千円			
	設備購入費	271,556千円	0千円	0千円	0千円	0千円				
	学生1人当り納付金	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次			
	1,410千円	1,210千円	1,210千円	1,210千円	千円	千円				
学生納付金以外の維持方法の概要				私立大学等経常費補助金、資金運用・事業収入等を充当する。						
既設大学等の状況	大 学 の 名 称		日本福祉大学							
	学 部 等 の 名 称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地	
	社会福祉学部	年	人	年次	人		0.94			
	社会福祉学科	4	490	3年次	40	2,140	0.94	昭和32年度	愛知県知多郡美浜町大字奥田字会下前35番6	平成27年度入学定員減（△50人）
	保健福祉学科	4	—	—	—	—	—	平成12年度	同 上	平成23年度より学生募集停止
	経済学部						0.63			
	経済学科	4	200	—	—	900	0.63	昭和51年度	愛知県東海市大田町川南新田229	平成27年度入学定員減（△50人）
	福祉経営学部									
	医療・福祉マネジメント学科	4	—	—	—	—	—	平成15年度	愛知県知多郡美浜町大字奥田字会下前35番6	平成23年度より学生募集停止
	健康科学部						0.99			
	リハビリテーション学科						1.07			
	理学療法学専攻	4	40	—	—	160	1.17	平成20年度	愛知県半田市東生見町26番2	
	作業療法学専攻	4	40	—	—	160	1.12	平成20年度	同 上	
	介護学専攻	4	40	—	—	160	0.92	平成20年度	同 上	
	福祉工学科	4	70	—	—	280	0.85	平成20年度	同 上	
	子ども発達学部						1.01			
	子ども発達学科	4	180	—	—	720	1.03	平成20年度	愛知県知多郡美浜町大字奥田字会下前35番6	
	心理臨床学科	4	135	—	—	540	0.99	平成20年度	同 上	
	国際福祉開発学部						0.51			
	国際福祉開発学科	4	80	—	—	320	0.51	平成20年度	愛知県東海市大田町川南新田229	
看護学部						1.09				
看護学科	4	100	—	—	200	1.09	平成27年度	同 上		
福祉経営学部						0.67				
医療・福祉マネジメント学科（通信教育）	4	800	400	4,000	—	0.67	平成15年度	愛知県知多郡美浜町大字奥田字会下前35番6		

既設大学等の状況	大学の名称		日本福祉大学大学院						所在地		
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度			
		年	人	年次人	人		倍				
	社会福祉学専攻修士課程	2	—	—	—	修士 (社会福祉学)	1.19	—	昭和44年度	愛知県名古屋市中区千代田五丁目22番35号	平成27年度より学生募集停止
	福祉マネジメント専攻修士課程	2	—	—	—	修士 (福祉マネジメント)	—	—	平成11年度	同上	平成21年度より学生募集停止
	心理臨床専攻修士課程	2	10	—	20	修士 (心理臨床)	1.00	—	平成15年度	同上	
	社会福祉学専攻修士課程(通信教育)	2	25	—	50	修士 (社会福祉学)	1.28	—	平成16年度	同上	
	社会福祉学専攻博士後期課程	3	—	—	—	博士 (社会福祉学)	—	—	平成8年度	同上	平成19年度より学生募集停止
	情報・経営開発専攻博士後期課程	3	—	—	—	博士 (人間環境情報)	—	—	平成13年度	愛知県半田市東生見町26番2	平成19年度より学生募集停止
	医療・福祉マネジメント専攻修士課程	2	30	—	60	修士 (医療・福祉マネジメント)	0.59	—	平成21年度	愛知県名古屋市中区千代田五丁目22番35号	
	国際社会開発専攻修士課程(通信教育)	2	25	—	50	修士 (開発学)	0.64	—	平成14年度	愛知県名古屋市中区千代田五丁目22番35号	
	国際社会開発専攻博士後期課程(通信教育)	3	—	—	—	博士 (開発学)	—	—	平成16年度	同上	平成19年度より学生募集停止
	福祉社会開発専攻博士課程	3	4	—	12	博士 (社会福祉学)	1.23	2.58	平成19年度	同上	
	福祉経営専攻博士課程	3	2	—	6	博士 (福祉経営)	0.66	—	平成19年度	同上	
	国際社会開発専攻博士課程(通信教育)	3	4	—	12	博士 (開発学)	0.16	—	平成19年度	同上	
	附属施設の概要	なし									

(注)

- 1 共同学科等の認可の申請及び届出の場合、「計画の区分」、「新設学部等の目的」、「新設学部等の概要」、「教育課程」及び「教員組織の概要」の「新設分」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 2 「教員組織の概要」の「既設分」については、共同学科等に係る数を除いたものとする。
- 3 私立の大学又は高等専門学校等の収容定員に係る学則の変更の届出を行う場合は、「教育課程」、「教室等」、「専任教員研究室」、「図書・設備」、「図書館」及び「体育館」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 4 大学等の廃止の認可の申請又は届出を行う場合は、「教育課程」、「校地等」、「校舎」、「教室等」、「専任教員研究室」、「図書・設備」、「図書館」、「体育館」及び「経費の見積もり及び維持方法の概要」の欄に記入せず、斜線を引くこと。
- 5 「教育課程」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。
- 6 空欄には、「—」又は「該当なし」と記入すること。

学校法人日本福祉大学 設置認可等に関わる組織の移行図

平成28年度	入学 定員	編入 学 定員	収容 定員	平成29年度	入学 定員	編入 学 定員	収容 定員	変更の事由
日本福祉大学				日本福祉大学				
社会福祉学部		3年次		<u>社会福祉学部</u>		3年次		
社会福祉学科	490	40	2,040	<u>社会福祉学科</u>	<u>400</u>	40	<u>1,680</u>	定員変更 (入学定員△90)
経済学部				経済学部				
経済学科	200	-	800	経済学科	200	-	800	
健康科学部				健康科学部				
リハビリテーション学科				リハビリテーション学科				
理学療法学専攻	40	-	160	理学療法学専攻	40	-	160	
作業療法学専攻	40	-	160	作業療法学専攻	40	-	160	
介護学専攻	40	-	160	介護学専攻	40	-	160	
福祉工学科	70	-	280	福祉工学科	70	-	280	
子ども発達学部				子ども発達学部				
子ども発達学科	180	-	720	子ども発達学科	180	-	720	
心理臨床学科	135	-	540	心理臨床学科	135	-	540	
国際福祉開発学部				国際福祉開発学部				
国際福祉開発学科	80	-	320	国際福祉開発学科	80	-	320	
看護学部				看護学部				
看護学科	100	-	400	看護学科	100	-	400	
福祉経営学部		3年次		福祉経営学部		3年次		
医療・福祉マネジメント学科 (通信教育)	800	400	4,000	医療・福祉マネジメント学科 (通信教育)	800	400	4,000	
				<u>スポーツ科学部</u>				
				<u>スポーツ科学科</u>	<u>180</u>	=	<u>720</u>	学部の設置 (認可申請)
計	2,175	440	9,580	計	<u>2,265</u>	440	<u>9,940</u>	
日本福祉大学大学院				日本福祉大学大学院				
社会福祉学研究科				社会福祉学研究科				
社会福祉学専攻修士課程 (通信教育)	25	-	50	社会福祉学専攻修士課程 (通信教育)	25	-	50	
心理臨床専攻修士課程	10	-	20	心理臨床専攻修士課程	10	-	20	
国際社会開発研究科				国際社会開発研究科				
国際社会開発専攻修士課程 (通信教育)	25	-	50	国際社会開発専攻修士課程 (通信教育)	25	-	50	
医療・福祉マネジメント研究科				医療・福祉マネジメント研究科				
医療・福祉マネジメント専攻 修士課程	30	-	60	医療・福祉マネジメント専攻 修士課程	30	-	60	
福祉社会開発研究科				福祉社会開発研究科				
社会福祉学専攻博士課程	4	-	12	社会福祉学専攻博士課程	4	-	12	
福祉経営専攻博士課程	2	-	6	福祉経営専攻博士課程	2	-	6	
国際社会開発専攻博士課程 (通信教育)	4	-	12	国際社会開発専攻博士課程 (通信教育)	4	-	12	
計	100	-	210	計	100	-	210	

教育課程等の概要

(スポーツ科学部スポーツ科学科)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
総合基礎科目	こころとからだ	1前		2		○									兼1
	視覚障害者支援論	1前		1		○									兼1
	ろう文化と手話	1前		2		○									兼1
	聴覚障害者の理解と支援	1前		1		○									兼1
	ふくしとフィールドワーク	1前		2			○								兼1
	法入門	1前		2		○									兼1
	福祉社会入門	1前		2		○									兼1
	知多学	1前		2		○									兼1
	経営学	1前		2		○									兼1
	統計学	1前		2		○									兼1
	社会学	1前		2		○									兼1
	哲学	1前		2		○									兼1
	キャリア開発 I	1前		2		○									兼1
	日本福祉大学の歴史	1後		2		○									兼1
	地震と減災社会	1後		2		○									兼1
	日本国憲法	1後		2		○									兼1
	フレッシュマンイングリッシュ I-1	1前	1				○								兼6
	フレッシュマンイングリッシュ I-2	2前		1			○								兼2
	フレッシュマンイングリッシュ II-1	1後	1				○								兼6
	フレッシュマンイングリッシュ II-2	2後		1			○								兼2
	情報処理演習 I	1前	2				○								兼4
	情報処理演習 II	1後		2			○								兼2
	海外フィールドワーク	1後		4				○							兼1
	スポーツ実技	1通	2				○					1			兼5
	政治学	2前		2		○									兼1
	福祉の力	2前		2		○									兼1
	キャリア開発 II	2前		2		○									兼1
	コミュニケーション力演習	2前		2		○									兼1
	スポーツイングリッシュ I	3前		1			○								兼1
	経済学	2後		2		○									兼1
	文章作成力演習	2後		2		○									兼1
	ふくしと減災コミュニティ	2後		2		○									兼1
	知多半島のふくし	2後		2		○									兼1
	スポーツイングリッシュ II	3後		1			○								兼1
	生命と環境	3前		2		○									兼1
	ふくしフィールドワーク実践	3後		2			○								兼1
小計 (36 科目)		—	6	60	0	—			0	0	0	1	0	兼35	

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
専門科目	生理学	1前		2		○			1	1					オムニバス
	スポーツ科学入門	1前	2			○			5	3		5			オムニバス
	スポーツ史	1前		2		○			1						
	スポーツ文化論	1前		2		○			1						
	スポーツビジネス	1前		2		○									兼1
	発育発達論 (運動発達・認識発達・ことばの発達)	1前		2		○									兼1
	機能解剖学	1前		2		○			1						
	認知心理学	1前		2		○			1			1			
	健康管理概論	1前		2		○			1						
	学校保健A (小児・精神)	1前		2		○			1						
	野外スポーツ論	1前		2		○				1					
	スポーツ社会学	1後	2			○			1						
	ふくしスポーツ論	1後	2			○			1						
	スポーツ哲学	1後	2			○				1					
	スポーツマネジメント	1後		2		○						1			
	スポーツ教育学	1後		2		○				1					
	スポーツキャリア教育	1後		2		○			1						
	スポーツ統計学	1後		2		○									兼1 ※演習
	スポーツと脳	1後		2			○		1			1			オムニバス 一部共同
	スポーツ生理学	1後	2			○				1					
	スポーツ心理学	1後		2			○		1						
	障害者スポーツ論	2前	2			○						1			
	スポーツ倫理学	2前		2		○				1					
	スポーツ支援者論	2前		2		○			1						
	身体表現・芸術表現論	2前		2		○						1			
	スポーツ・運動指導者論	2前		2		○			1						
	スポーツ医学A (内科系)	2前		2		○			1						
	スポーツ栄養学	2前		2		○						1			
	コーチング科学	2前		2		○									兼1
	特別支援教育論	2前		2		○						1			
	肢体不自由児教育論	2前		2		○			1						
	スポーツバイオメカニクス	2前		2		○			1						
	スポーツ人類学	2後		2		○			1						
	地域スポーツ論	2後		2		○			1			1			共同
武道論	2後		2		○									兼1	
スポーツジェンダー論	2後		2		○				1						
スポーツ医学B (外科系)	2後		2		○			1							
トレーニング科学	2後	2			○				1						
測定・評価	2後		2			○					1				
メンタルトレーニング	2後		2			○		1			1				

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
専門科目	知的障害児教育論	2後		2		○									兼1	
	スポーツ科学演習	2通	2				○		2	3			3		兼1	オムニバス
	スポーツコミュニケーション	3前		2		○									兼1	
	スポーツメディア論	3前		2		○									兼1	
	衛生・公衆衛生学	3前		2		○			1							
	学校保健B（学校・救急処置）	3前		2		○			1							
	肢体不自由児の心理	3前		2		○			1							
	肢体不自由児の生理と病理	3前		2		○									兼1	
	障害者スポーツ指導法演習A	3前		1			○				1					
	ふくしスポーツ演習	3前		4			○		1				1			一部集中共同
	スポーツ政策・行政論	3後		2		○									兼1	
	スポーツ法学	3後		2		○									兼1	
	アスレティックリハビリテーション	3後		2		○									兼1	
	加齢学	3後		2		○			1	1						オムニバス
	肢体不自由児指導法	3後		2		○			1							
	障害者スポーツ指導法演習B	3後		1			○				1					
	コンディショニング演習	3後		2			○				1					
	スポーツフィールドワークⅡ-1	4前		2			○				1					集中
	スポーツフィールドワークⅡ-2	4後		2			○		1							集中
	専門実技（ダンス）	1前		1			○						1			
	専門実技（野外運動A）	1前		1			○				1					集中
	専門実技（陸上）	1後		1			○								兼1	
	専門実技（バスケットボール）	1後		1			○								兼1	
	専門実技（器械運動）	2前		1			○								兼1	
	専門実技（水泳）	2前		1			○		1							
	専門実技（バレーボール）	2前		1			○								兼1	
	専門実技（柔道）	2後		1			○								兼1	
	専門実技（アダプテッド・スポーツ）	2後		1			○				1		1			
	専門実技（サッカー）	2後		1			○								兼1	
	専門実技（バドミントン）	2後		1			○						1			
	専門実技（野外運動B）	2後		1			○				1					集中
	専門実技（野外運動C）	3前		1			○			1						集中
	専門実技（ソフトボール）	3前		1			○								兼1	
専門実技（テニス）	3前		1			○						1				
専門実技（卓球）	3前		1			○								兼1		
専門実技（剣道）	3前		1			○								兼1		
スポーツ指導法演習（陸上）	2前		1			○								兼1		
スポーツ指導法演習（バスケットボール）	2前		1			○								兼1		
スポーツ指導法演習（水泳・水中運動）	2後		1			○								兼1		
スポーツ指導法演習（ダンス）	2後		1			○						1				

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
専門科目	スポーツ指導法演習（バレーボール）	3前		1			○		1						兼1	
	スポーツ指導法演習（サッカー）	3後		1			○								兼1	
	スポーツ指導法演習（テニス）	3後		1			○					1				
	スポーツ指導法演習（バドミントン）	3後		1			○					1				
	スポーツ指導法演習（卓球）	3後		1			○								兼1	
	スポーツ指導法演習（ゴルフ）	4前		1			○			1						
	スポーツ指導法演習（エアロビクス）	4前		1			○								兼1	
	スポーツ指導法演習（レクリエーション・ニュースポーツ）	4前		1			○								兼1	
	保健体育科教育法Ⅰ（授業づくりの基礎理論）	2後		2		○			2							オムニバス一部共同
	保健体育科教育法Ⅱ-A（陸上・器械運動）	3前		2		○										兼2 オムニバス一部共同
	保健体育科教育法Ⅱ-B（球技・水泳）	3前		2		○			2							オムニバス一部共同
	保健体育科教育法Ⅱ-C（武道）	3後		2		○										兼2 オムニバス一部共同
	保健体育科教育法Ⅱ-D（ダンス・体育理論）	3後		2		○			1			1				オムニバス一部共同
	保健体育科教育法Ⅲ（授業づくり）	3後		2			○		1			1				オムニバス一部共同
	導入ゼミ	1通	2				○			1		7				
	スポーツフィールドワークⅠ	2通	2				○		4	5		6				
	専門演習Ⅰ	3通	2				○		9	4		4				
	専門演習Ⅱ	4通	4				○		9	4		4				
小計（98科目）	—	26	143	0		—		10	5	0	8	0		兼20		
外国人留学生・帰国生徒の特例科目	日本語と文化Ⅰ-1	1前		1		○									兼1	
	日本語と文化Ⅰ-2	1後		1		○									兼1	
	日本語と文化Ⅱ-1	1前		1		○									兼1	
	日本語と文化Ⅱ-2	1後		1		○									兼1	
	日本語と文化Ⅲ-1	2前		1		○									兼1	
	日本語と文化Ⅲ-2	2後		1		○									兼1	
	日本語と文化Ⅳ-1	2前		1		○									兼1	
	日本語と文化Ⅳ-2	2後		1		○									兼1	
小計（8科目）	—	0	8	0		—		0	0	0	0	0		兼2		

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
自由科目	教職入門B	1前			2	○									兼1
	知的障害児の心理	2前			2	○									兼1
	視覚・聴覚・病弱児論	2前			2	○									兼3 オムニバス
	教育原理B	2前			2	○									兼1
	教育と発達の心理学B	2前			2	○									兼1
	教育制度論B	2前			2	○									兼1
	教育課程論B	2前			2	○									兼1
	教育相談の基礎と方法B	2前			2	○									兼1
	知的障害児の生理と病理	2後			2	○									兼1
	道德教育の指導法B	2後			2	○									兼1
	教育方法論B	2後			2	○									兼1
	知的障害児指導法	3前			2	○				1					
	生徒・進路指導論B	3前			2	○									兼1
	発達障害児論	3後			2	○									兼1
	特別支援教育課程論	3後			2	○									兼1
	特別活動方法論B	3後			2	○									兼1
	教育実習ⅠB（事前事後）	3後～4前			1		○		2			1			
	教育実習ⅡB	4前			4		○		1			1			集中
	教育実習ⅢB	4前			2		○		1			1			集中
	障害児教育実習Ⅰ（事前事後）	4前～4後			1		○		1	1		1			集中
	障害児教育実習Ⅱ	4後			2		○		1	1		1			集中
	教職実践演習（中高）	4後			2		○		3	1					
	健康運動特論Ⅰ	3後			2	○						1			
	健康運動特論Ⅱ	4前			2		○					1			
	ビジネススキル	1後			2	○									兼1 メディア
	インターンシップⅠ	3・4			1		○								兼1 集中
	インターンシップⅡ	3・4			2		○								兼1 集中
小計（27科目）	—	0	0	53	—			4	1	0	3	0	兼16		
合計（169科目）		—	32	211	53	—		10	5	0	8	0	兼64		
学位又は称号		学士(スポーツ科学)		学位又は学科の分野			体育関係								
卒業要件及び履修方法						授業期間等									
4年間以上在学するとともに、総合基礎科目25単位以上、専門科目76単位以上、計124単位以上を修得すること。（履修科目の登録の上限：48単位(年間)）						1学年の学期区分			2期						
						1学期の授業期間			15週						
						1時限の授業時間			90分						

(注)

- 1 学部等、研究科等若しくは高等専門学校の学科の設置又は大学における通信教育の開設の届出を行おうとする場合には、授与する学位の種類及び分野又は学科の分野が同じ学部等、研究科等若しくは高等専門学校の学科（学位の種類及び分野の変更等に関する基準（平成十五年文部科学省告示第三十九号）別表第一備考又は別表第二備考に係るものを含む。）についても作成すること。
- 2 私立の大学若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。
- 3 開設する授業科目に応じて、適宜科目区分の枠を設けること。
- 4 「授業形態」の欄の「実験・実習」には、実技も含むこと。

授 業 科 目 の 概 要			
(スポーツ科学部スポーツ科学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
総合基礎科目	こころとからだ	本科目では、青年期の複雑な「こころとからだ」について学ぶ。心身ともに健康で、安心できる大学生活、色々な悩みや将来の不安に正面から向き合える大学生活、そして賢い生活者として充実した大学生活を送るために必要な事項について考え理解を深める。	
	視覚障害者支援論	聴覚障害者における大学生活でのバリアを理解し、適切な対応が出来るようにするとともに、ノートテイクやパソコンテイクの支援活動ができるような方法論を習得することを目標とし、「聴覚障害者の理解・関わり方」「情報(講義)保障」などについて学ぶ。また、「ノートテイクの方法」「パソコンテイクの方法」の支援活動ができる方法を学ぶ。	
	ろう文化と手話	聴覚障害を有している者の中にはろう者と呼ばれ、日本手話を日常的に用いる者がいる。本科目では、手話による挨拶、自己紹介など基本的な手話表現を習得し、聴覚障害者とのコミュニケーションが図れるようになることを目指す。また、ろう文化を知ることでマイノリティ文化の理解を深める。	
	聴覚障害者の理解と支援	本科目は、講義と実技方法の理解と習得を目指す。講義では「聴覚障害者の理解・関わり方」、「情報(講義)保障」、「聴覚障害はコミュニケーション障害」などを学ぶ。実技の理解習得では、「ノートテイクの方法」、「パソコンテイクの方法」を身につけられるようにし、実際に支援活動ができる方法を身につける。	
	ふくしとフィールドワーク	ふくしコミュニティプログラムについての概説を行うことを通して、地域と関わるフィールドワークの必要性について考える。そして、ふくし(広義の福祉)の視点でフィールドワークを行う学生にとっての学内、学外の資源を知り、フィールドワークの多様な方法を理解する。その上で、実際にフィールドワークを行う際に必要とされる作法、記録やデータの扱い方とまとめ方、リスクマネジメントについて学ぶ。	
	法入門	社会・経済の成り立ちと法とのかかわりについて、大学の個々の専門科目の講義ではその都度立ち返って説明することが難しい初歩的な事柄から丁寧に学習を進めていく。身近なテーマを入口に、それぞれの事象と法との関わりを、歴史的な視点や専門分野からの視点も加えつつわかりやすく解説する。これらは、成人になるための、大人として知っておくべき法的世界の仕組みや知識でもあり、さらに社会福祉、教育、経済・経営、国際社会の現場で必要不可欠な人権意識の基礎でもある。	
	福祉社会入門	「福祉」という言葉は、「しあわせ」を意味する。その英文であるウェルフェアは、「よりよく生きる」という意味である。福祉社会は、「いのち」「くらし」「いきがい」を大切に、人がゆたかに生きていくことを支える社会であり、福祉社会を実現するためには、社会福祉をはじめとして、さまざまな領域の研究や実践が力を合わせる必要がある。「福祉社会入門」では、「広がるふくし」の観点から「福祉」への接近について学ぶ。	
	知多学	日本福祉大学が立地する知多半島を題材として、地域社会を構成する自然・社会・歴史文化的な特徴を理解し、さらに各講で登場する多彩な教員や地域で活躍する方々の活動を学びながら、地域を知ることの楽しさを体感する。そして、大学で学ぶことの楽しさや充実感、発展性を感じ取り、卒業後に、それぞれの地域で責任ある「市民」として活躍できるようにするための出発点とする。	
	経営学	経営学は、生きている存在ともいえる現実の企業経営を扱う学問だけに実践的性格が強い。したがって、経営学を学ぶ際には現実の経済やそのもとの企業行動、経営活動を見る目を養うことが大切になる。そのためには、まず経営学の基本的な理論を学び、それを現実の経営に当てはめながら実践的に考えることが求められる。本科目では、そうした考え方からテキストの内容をできるだけわかりやすく説明し、現実の企業経営を科学的に観察・理解し、そのあり方を考えるための知識・知見を身につけることをねらいとする。	
統計学	官庁統計や簡単な調査報告・フィールドワークの論文が読めるための基本的な統計手法を学ぶ。具体的には、様々な記述統計量の算出や表・グラフの作成、およびそれらの読み方について学ぶ。さらに、2変数の関係を測る相関係数について学び、因果関係や疑似相関との違いの理解を目指す。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
総合基礎科目	社会学	前半では「社会的に」観察・考察するための「道具」について紹介し、後半では社会学の諸領域における実証研究を概観することで、社会学が家族や地域など身近な問題をどのように扱っているかを学ぶ。	
	哲学	現代に生活する私たちにとって最も重要な課題は、私たちの生存と未来の生活を保障することである。古代以来、哲学・思想はそうした課題を引き受け、様々な仕方で、その解決の可能性をさぐってきた。そのことを簡単に言い表せば、「再生」（現在をよりよい未来に新しくつなげる試み）を可能にする根拠を探求することである。哲学・思想の営みにおいて、そうした再生への努力を通して考える機会とする。	
	キャリア開発 I	進路選択において参考となる事項について講義を行う。就職や雇用をめぐる現在の状況、本学学生の就職状況、社会人として求められる力、資格は就職に必要なのか、就職活動で起きる問題などについて学ぶ。さらに実業界で活躍されている方からさまざまな業界における仕事や働き甲斐、また希望する業界へ進むためにはどのような準備が必要か、などについて理解を深める。講義では、ただ話を聞くだけではなく、ゲストとの交流も交え、できるだけ話したり書いたりする機会を設ける。	
	日本福祉大学の歴史	建学の精神と本学の研究・教育の歴史と展望を知り、自分がどう学びどう成長していくか考える内容である。戦後日本の大学教育の中で本学が創設されたことの歴史的な意義、および1) 本学がどんな時代背景の中で福祉の教育・研究に取り組んできたのか、2) 広義の福祉にかかわる人材をいかに広く送りだしてきたのか、3) 今後どのような人材養成を目指そうとしているのかについて、キャリア教育の一環として学ぶ。	
	地震と減災社会	災害について客観的な事実だけではなく、災害への具体的な対策を学ぶことを目的とする。過去の災害、地震や津波について理解するために必要な知識を学び、さらに、災害イメージネーションを持ち、災害が発生したときに適切に行動するための意識化を図れるようにする。被災者としてだけではなく、救援者など当事者意識をもつ機会とする。	
	日本国憲法	法は社会を観察するためのひとつのツールである。多くの人がさまざまな考えを持って共同生活をする以上、そこでは全員が共有すべき「ルール（法）」が必要となるが、そこで考えなければならないのは「どのようなルール（法）をつくるべきか」である。本科目では、現在の日本社会とそこでの法関係を題材に、「本当にこういうルール（法）でいいのか」、「本当にこういう社会でいいのか」を考える。日本国憲法の学習が中心になるが、関連する民法や刑法などの他の法律も併せて学習する。	
	フレッシュマンイングリッシュ I - 1	英語を読むこと、文法を中心に学習する。高校までに学習した文法事項を復習し、使える英文法として習得を目指す。身近に起きたことを簡単な文で表現する。さらに、文法を基礎として、英語の聞く、読む、話す、書くという4技法の運用能力を習得する。	
	フレッシュマンイングリッシュ I - 2	フレッシュマンイングリッシュ I - 1 に引続き、英語を読むことと、文法を中心に学習する。習った英文をもとに、英語での自己表現につなげる。英文読解はリスニングから始め、通訳練習、音読トレーニングを通じてリスニング能力を身につける。社会に出た後に必要な単語や熟語を増やすことを目指す。	
	フレッシュマンイングリッシュ II - 1	英語の会話力、リスニング力を中心に学習する。高校までに学習してきた事柄を再確認し、コミュニケーション能力を習得する。状況に応じた適切な表現を理解し、自分自身のことが伝えられる能力を身につける。	
	フレッシュマンイングリッシュ II - 2	フレッシュマンイングリッシュ II - 1 に引続き、英語の会話力、リスニング力を中心に総合的なコミュニケーション能力を学習する。教材を通して、情報を正確に聞き取ることができる能力を身につける。さらに、日常生活場面や社会的活動場面に生かせる英語表現を習得する。	
情報処理演習 I	あらゆる場面において、人に自分の考えをわかりやすく伝えることは重要である。図やグラフによるわかりやすい資料作成、論理的で説得力のある資料作成は、そのためにも必須となる。これらを体験的・統合的に学習していく。大学の情報環境、インターネット環境についての理解も深め、学習や各種活動のためのリソースとして活用していくための基礎を築く。（ワード及びエクセルによる資料作成）		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
総合基礎科目	情報処理演習Ⅱ	あらゆる場面において、人に自分の考えをわかりやすく伝えることは重要である。図やグラフによるわかりやすい資料作成、論理的で説得力のある資料作成は、そのためにも必須となるもの、これらを体験的・統合的に学習していく。大学の情報環境、インターネット環境についての理解も深め、学習や各種活動のためのリソースとして活用していくための基礎を築く。(パワーポイントを用いた資料作成とプレゼンと簡単なプレゼンテーション)	
	海外フィールドワーク	本科目は2月にフィリピン(メトロマニラ)での大学や近隣地域で実施される一連のフィールドスタディプログラム(事前学習・現地でのフィールドワーク・帰国後の報告書作成)で構成される。異国の社会構造学を把握する力や異文化理解力を身につけることを目指し、自身の英語力がどの程度海外で通用するかを試みる。	
	スポーツ実技	ユネスコの「体育・スポーツ憲章」に代表されるように、体育・スポーツに関する教養は、スポーツ権(権利としてのスポーツ)として考えられており、現代を生きる私たちにとって非常に重要なものとなっている。本科目では、人間が人間らしく生きるために、体育・スポーツに関する国民的教養を真の意味で「スポーツの主人公」にふさわしく形成することを目的とする。そのために、6種目程度用意された中から学生それぞれが選んだスポーツ種目を1年間かけて、みながうまくできるよう集団的に取り組む中で、スポーツ技術の向上に支えられて、スポーツを楽しむ能力を身につける。科目担当教員は、1種目を担当し、1年間通じて指導を行う。	
	政治学	政治学の基礎となる人間論・社会論を入り口とし、欧米だけでなくアフリカ・アジア・日本の政治概念や制度を国際的に比較検討する中で、社会の制度を支える規範(掟)とその運用の中に社会的公共性の基盤を探ることとする。政治学原論と現代政治論そして伝統的社会を含む社会と近代国家間の政治関係、国際的な政治関係を論ずる。福祉概念を生み出した政治学を、その原論(人間論、社会論、権力論、暴力論)および現代の民主政治制度およびこれを支える政治思想の内外の歴史とともに学ぶことを狙いとし、社会的合意形成のプロセスを理解する力を身につける。	
	福祉の力	日本福祉大学では学生の就業力を「福祉の力」と表現している。「福祉の力」とは、仕事をするうえで「相手を尊重すること」と、職場や地域で様々な人と「つながる力」をつけることを意味しており、相手の立場を尊重し、色々な人とつながることで、新たな仕事の可能性が生み出される。他分野・他職種の人々とつながることで、自分では解決できない課題の解決方策も見えてくる。卒業後、自分一人で頑張るのではなく、上手に人々とつながるために、自分の関心分野とは異なる他分野に関する基礎知識を修得する。	
	キャリア開発Ⅱ	本科目では、自己の理解や社会の仕組みについて学ぶ。また、グループワークでは与えられたテーマに対し複数の学生と議論し答えを模索することで、協調性や発信力を養うほか、講師の職業体験を交え、働くうえでの楽しさや難しさを理解し、自分自身の将来を考えるきっかけとして位置付ける。	
	コミュニケーション力演習	2年次以降は、授業内外でこれまで以上にグループでの活動が多くなり、自分の意見を持って他者と話をするのが求められる機会が多くなる。本科目では、グループでの活動に不可欠な「コミュニケーション」を取り上げ、自分と相手を正しく理解することで円滑なコミュニケーションやディスカッションができることを目標とする。学問的な知見を踏まえた上で授業を行うため、授業の前半はコミュニケーションに関する考え方や知識について講義を行う。	
	スポーツイングリッシュⅠ	フレッシュマンイングリッシュⅠ・Ⅱにおける学びを生かし、スピーキングを中心とした基礎的な用語や英語を体育・スポーツの場面において活用することを学び、英語による初歩的なコミュニケーションを図ることができると目指す。	
	経済学	私たちの社会では、家計、企業、銀行、政府などの組織がさまざまな経済活動を行っている。自国と外国との関係も無視できない。経済を勉強していくにあたり、それらの活動がどのように関わり合い、結果としてどのような経済状況が生み出されるのかについて考える。そのために経済学の基礎的な理論を学び、理論的に考える練習をすると同時に、現実の経済についての理解を深めるため、日本経済の現状についても考える。	
	文章作成力演習	学年進行とともに、各種の実習、インターンシップや就職活動などのさまざまな学外実習が始まり、実習記録やエントリーシートなど文章を書く機会が増える。その準備段階として、自分の伝えたいことを相手にうまく伝えることができる文章を目指し、文章の基礎の習得を目的とした演習を行う。本科目は、基礎編(1～3)から応用編までで構成される。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
総合基礎科目	ふくしと減災コミュニティ	本学は、制度中心の従来の「社会福祉」の枠を広げ、多領域が関連・連携しあう広い意味の福祉を「ふくし」ととらえ、様々な分野で「ふくし」の視点で活躍できる人材「ふくし・マイスター」を全学部共通の取り組みとして養成している。この科目は、「ふくし・マイスター」養成のための地域志向科目の一つに位置付け、全学共通の履修を可能とする。この科目は、災害に対応する市民の役割、地域の減災のために行われる取組、災害対応・地域減災で多様な職種が果たす役割と多職種連携のあり方の3点を理解し、その学びを通して学生が卒業後にそれぞれの立場でふくし・マイスターとして災害に対する役割を担う力を高めることをねらいとする。	
	知多半島のふくし	知多半島の地域特性を理解し、「ふくし」に携わる人材・職業を知り、その具体的な活動や実践を通して、知多半島の「ふくし」の現状と課題を学習する。またその根底に多職種連携があることやその必要性について理解する。「ふくし」に携わる人材や職種を、自分たちのまちを暮らしやすくしていくために働きかけている人たちと広く定義して理解する。さらに、本学COC (Center of Community) の取組が学部横断的であり、学則の教育目標に重なることを踏まえて、各学部の特性も合わせて伝え、日本福祉大学で学ぶことに対する意識や視野も養う。	
	スポーツイングリッシュⅡ	フレッシュマンイングリッシュⅠ・Ⅱにおける学びを生かし、スポーツ科学に関する専門書を講読し、英語の読解力を養うとともに、スポーツ関連の基礎的な用語に慣れさせる。ここでは、簡単な英語による文書によって、コミュニケーションを図ることができることを目指す。	
	生命と環境	人間のおかれている環境についての理解を深める。環境問題を構造的に見ていくことからはじめ、環境とエネルギーの関わりについて学ぶ。とくに、人間の生活には良質なエネルギーが必要である一方で、エネルギーの質はしだいに劣化する性質があることなど、環境科学の基礎について学ぶ。	
	ふくしフィールドワーク実践	本科目では、知多半島の3つの市町(美浜町、半田市、東海市)の地域課題解決に求められる多職種・多分野連携のあり方、その中で地域の各主体の役割などを学ぶ。全学部生の混成クラスを複数開講し、地域社会での体験学習を重視したサービスラーニングの教育方法を取り入れ、「事前学習、フィールドワーク、事後学習」を集中的に展開して学びを深める。各クラスはそれぞれのフィールドとテーマを持って学習にあたる。いのちを守り・支え合う災害時のヒューマンケア、一人の暮らしを皆で支える地域包括ケア、いきいき暮せるまちを作る地域デザインなどをテーマとする予定である。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	生理学	<p>生理学では、生命維持に必要な生体の恒常性（ホメオスタシス）と行動の基礎となる筋と神経の働きについて学ぶ。血液、呼吸、循環、体温調節、排せつ、内分泌などの植物機能と、からだの働きの理解につながる筋の収縮、末梢神経系、中枢神経系、感覚などの動物機能について、分子レベルから個体レベルまでの幅広い理解を目的とする。さらに、そうした機能が正常に働かない場合に疾病につながることを理解する。</p> <p>（オムニバス方式／全15回）</p> <p>（6 城川哲也／7回） 筋の収縮、末梢神経系、中枢神経系、感覚などの動物機能について</p> <p>（12 西村直記／8回） 血液、呼吸、循環、体温調節、排せつ、内分泌などの植物機能について</p>	オムニバス方式
専門科目	スポーツ科学入門	<p>スポーツ科学は人文科学、社会科学、自然科学の3分野から構成されていることを理解し、それぞれの分野に属する教員から個別学問領域において、これまでどのような研究成果が蓄積され、今後どのような課題に向かって研究が進められていくのかについて講義する。その学びは、各自のスポーツに対する関心を膨らませ、その後自分がどのような研究を志向するのか考えることにつなげる。</p> <p>（オムニバス方式／全15回）</p> <p>（1 新井博／1回） スポーツ史「スポーツの変遷」</p> <p>（4 合屋十四秋／1回） スポーツバイオメカニクス「スポーツをするからだのしくみ」</p> <p>（7 高橋成夫／1回） スポーツ医学「スポーツとケガの関係」</p> <p>（8 藤田紀昭／1回） スポーツ社会学「社会とスポーツのかかわり」</p> <p>（9 吉田文久／1回） スポーツ人類学「人はなぜスポーツ継承してきたのか」</p> <p>（11 竹村瑞穂／1回） スポーツ哲学・倫理学「人はなぜスポーツするのか」</p> <p>（12 西村直記／1回） スポーツ生理学「スポーツするからだの変化」</p> <p>（14 山根真紀／3回） オリエンテーション スポーツトレーニング科学「スポーツとトレーニング」 まとめ</p> <p>（15 安藤佳代子／1回） 測定評価、スポーツ統計学「からだやスポーツの数的理解」</p> <p>（17 岡田雄樹／1回） スポーツ教育学「スポーツの教育的意味」</p> <p>（20 千葉洋平／1回） スポーツマネジメント「スポーツをマネジメントする」</p> <p>（21 山本和恵／1回） スポーツ栄養学「スポーツを支える栄養」</p> <p>（22 山本真史／1回） スポーツ心理学「こころとスポーツの関係」</p>	オムニバス方式
	スポーツ史	<p>スポーツの歴史について、単なる事実の時間的な連続として理解するのではなく、その時代背景と結びつけながら、スポーツがどのように行われてきたのか理解する。そして、将来のスポーツのあり方を展望する視点をもって、現在のスポーツのあり方を批判的に検討する。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	スポーツ文化論	スポーツ文化の構造が、スポーツ観、スポーツ技術、スポーツ事物、スポーツ技術・戦術から出来ていることを理解する。さらに、スポーツ文化の内容について、ナショナルティ、スポーツ教育、スポーツ経済、スポーツメディア、ジェンダー、テクノロジーについて学び、スポーツ文化とはどのようなものかを理解し、スポーツ文化と自らの関わり方について考える。	
	スポーツビジネス	スポーツがビジネスとして成立するまでの歴史を辿り、その上で、現在、スポーツが一大ビジネスと位置づく全体像を把握する。具体的には、国民の注目度が高い「オリンピック・パラリンピック」、プロ野球やJリーグを中心とする「プロスポーツ」（リーグ経営、チーム経営）、「スポーツ産業」など、スポーツにおけるビジネス化現象を分析し、課題を受け止め、これからのスポーツとビジネスの関係づくりについて検討する。	
	発育発達論（運動発達・認識発達・ことばの発達）	人間は、歩いたり、走ったり、跳んだり、投げたり、蹴ったりといった基礎的な運動、さらにスポーツ固有の運動技術の獲得など、意識的・能動的な活動によって多様な運動が「できる」ようになるが、その背景には「わかる」という認識活動が介在している。そして、この「わかる」という認識の発達とことばの発達は、関係性を持っている。つまり、運動と認識とことばは、密接な関係性を持ちながら発達していくのである。本科目では、運動・スポーツにおける「できる」と「わかる」の関係について学ぶ。	
	機能解剖学	人体を形成する骨格と筋は、我々の意思を反映した運動を可能にする。人体の構造と機能は、スポーツ科学を学習する者にとって必須の知識である。本科目では、運動器系（筋骨格系、神経系）に焦点をあて、運動器の全体像を理解することを目標とする。次の内容を含めた授業計画に基づき、授業を展開する。①骨・関節の構造と機能、②骨格筋の名称、位置、走行、機能の理解、③骨格筋と支配神経の関係、④主な末梢神経の走行と機能の理解、さらに運動器で見られる病的状態についても概略を説明し、機能不全との関連に言及する。	
	認知心理学	人の基本的な活動である「見る、聞く、話す、覚える、考える、他人との関わりなど日常、非意識的に行なわれる知的活動（認知的活動）」を可能にする「こころのはたらき」を、科学的・学際的な観点から基本的な知識を身につける。次いで、知覚・注意・表象・記憶・言語・課題解決などの具体的な事項について、人の活動を当てはめて理解を深めていき、最終的に各自が興味ある事項を取り上げてまとめる。	
	健康管理概論	本科目では、健康日本21（第二次）を推進するための基本的な知識として、健康の概念、健康増進の施策と社会的問題点、そして種々の現場での健康管理の方法について学習する。具体的には健康の保持・増進や疾病予防のための健康管理の必要性、問題点および健康管理のあり方についての知識を習得し、職場や地域に貢献できる能力を身につける。また、健康をめぐる社会問題については具体例を挙げ、それらの基礎知識の習得とともに、実際に行われている公的な予防法や対策について学ぶ。	
	学校保健A（小児・精神）	子どもが健全な発育発達を遂げるために、教師はどのように対応していくべきか。その方法を考えることができるよう、児童・生徒を取り巻く様々な健康課題を取り上げる。児童・生徒の健康問題は身体的な疾患ばかりでなく、精神的な疾患について理解を深めることも重要である。さらに、学校全体の安全管理にどのように取り組むのか、事件・事故への対応や危機管理も含めて理解が必要である。また、学習した内容をまとめ発表することで、自身の興味・関心をさらに深める機会とする。	
	野外スポーツ論	スポーツにおける野外運動の位置づけを理解し、安全に活動するための基礎的な知識を身につける。さらに、野外運動の代表的な活動である「キャンプ」については、歴史的な背景と概要を学ぶとともに、指導者としての資質と役割を理解し、具体的なプログラムの実施方法について学ぶ。これによって、危険を理解して、安全に配慮したキャンププログラムの立案ができる力を身につけることをねらいとする。	
スポーツ社会学	スポーツにかかわる様々な事象を社会学的視点から分析し、理解し、説明する力を身につける。社会学的視点とは、社会事象を説明する諸理論である。具体的にはプレイ論、スポーツ近代化論、スポーツ指導者論、ジェンダー論、社会化論などを使い、スポーツとは何か、大相撲の構造的な問題点、スポーツにおけるジェンダーバイアスなどについて考える。またスポーツにかかわるそれらの諸問題を批判的に理解、説明し、スポーツの社会的発展に結びつける力を身につける。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	ふくしスポーツ論	健康や医療、日々の暮らし（経済）、教育や発達など様々な分野において「ふくし」が存在することを理解する。また、関連文書や映像資料等を用いて、障害者施設、学校、高齢者施設、地域コミュニティ、リハビリテーション施設などの現場で実施している運動やスポーツの事例とともに、「ふくしスポーツ」について理解する。そのうえで様々な現場での課題やそこで働く人々の実態を知り、運動やスポーツの力を用いてそれらの課題を解決する方法についてグループワークなどを通じて考える。	
	スポーツ哲学	スポーツや身体の問題について、哲学的思考を用いて検討し、また各自が自分なりに「哲学」する力を身につける。ここでは、「スポーツとはそもそも何か」、「スポーツにおける競争の意味とは」などを命題に、スポーツの本質をめぐり考察をし、自答しながら検討していく。	
	スポーツマネジメント	本科目では、地域、学校、民間、公共施設等におけるスポーツマネジメントをめぐる今日の課題について理解する。また、そこでのスポーツ現象を成立・維持・発展させ、長期的に活動が継続されるための人的・物的・財務的資源に関する知識を身につける。さらに学校体育の実践において必要とされるマネジメントの知識についても修得する。	
	スポーツ教育学	まず、授業の前提的知識として必要となる、スポーツとは何か、教育とは何か、という原理的問いについて学習する。その上で、スポーツ教育の可能性と限界について学ぶ。スポーツの多様な価値とは何かを理解する一方で、ドーピングやジェンダー問題といったスポーツやスポーツ教育の負の側面も理解する。さらに、実際にスポーツ教育について、実践事例を通して自ら具体化したり、新たに発案したりできるようにする。	
	スポーツキャリア教育	スポーツに関連する職業やボランティアなどに取り組み、活躍している人（ゲスト講師）から、自身がどのようにスポーツと関わり、どのようにしてその分野で活躍するまでに至ったのか、またその結果、自分の生き方や人生設計にどのようにつながっていったのかを講義してもらい、スポーツを生かした自分のキャリアの形成につなげる。ゲスト講師による講義毎にミニレポートを作成し、最終回ではまとめのレポートを作成する。	
	スポーツ統計学	いろいろな分野で統計が用いられ、人々の心理や行動を理解しようとしている。ここでは、スポーツを「する人」、「みる人」など人を対象にした統計から、スポーツの環境を調査する統計まで、スポーツ事象を統計的に理解し、受け止めるために実施される調査方法（質問紙の作成とデータ収集を含む）やそこで得られたデータを解析する方法を学ぶ。具体的には公的に実施されているスポーツや健康に関する調査・測定データ（例えば新体力テスト全国調査結果など）を用い、それらの分析方法や利用方法を学ぶ。	講義 20時間 演習 10時間
	スポーツと脳	スポーツでよいパフォーマンスを得るには、筋力や持久力だけでなく、脳のはたらきが重要である。ある動作を繰り返し行うことで、その動作の学習と上達をもたらされるのも脳のはたらきである。本科目では、次のような項目について、基礎的な知識を身につけ、実際の計測を行い得られたデータについての基礎的な解析方法を学ぶ。①運動の制御に関わる解説と生理の基礎、②筋電図の測定、③データ処理の基礎、④実験研究の初歩 (オムニバス方式／全15回) (6 城川哲也／5回) オリエンテーション、筋電図の測定、実験研究の導入について (22 山本真史／4回) 運動制御に関わる解説と生理の基礎、データ処理の基礎について (6 城川哲也・22 山本真史／6回) (共同) 表面筋電図の測定、誘発筋電図の測定、運動制御系研究事例について	オムニバス方式 一部共同
	スポーツ生理学	スポーツやトレーニングによって人体に刺激や負荷を与えることにより、身体の生理機能がどのように変化するかについて、呼吸循環系、代謝系、内分泌系等を中心に学習する。特に、健康の保持増進から競技力の向上まで、その目的に合わせて身体的能力を高めるため、またそれを維持するための適切かつ効果的な負荷を知り、トレーニングやスポーツ現場での実際の指導につなげるための基礎的理論を学ぶ。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	スポーツ心理学	本科目では、人を取り巻くスポーツ環境で生じるこころの事象を、身体反応や運動パフォーマンスと関連させて解説する。具体的には、人は何を見、聞き、感じ、どのように判断して運動を行っているのかを解明するために、スポーツ心理学領域で研究されている知覚・認知・学習のメカニズム、臨床的基礎に立った情緒、適応、パーソナリティなどの知見を紹介しながら「スポーツにおけるこころと身体の繋がり」について明らかにしていく。	
	障害者スポーツ論	身体障害、知的障害、精神障害など各障害についてその原因や症状や特性について理解し、そうした障害のある人々とスポーツの関係性について学ぶ。また、障害者スポーツの理念や文化的特性、歴史、我が国における施策や制度、各種大会、障害によるクラス分け（障害区分）について理解する。障害者スポーツにおける用具の工夫やルール、それぞれのスポーツの技術的な特性について紹介し、障害に合わせたスポーツの導入や指導方法について理解する。	
	スポーツ倫理学	さまざまな倫理理論の理解を通して、スポーツにおける倫理的諸問題について熟考する。例えば、「ドーピング問題」や「スポーツにおける暴行」などの問題事象をもとに、それらの問題の根底にあるスポーツにおける倫理観や社会的背景を探り、これからのスポーツのあり方、そしてスポーツの主体者のあり方を問う。	
	スポーツ支援者論	スポーツを支える役割を担っている人（ゲスト講師）による講義を通して、スポーツ選手は、いろいろな人たちによって支えられていることを知り、支えてくれる人たちがそれぞれの立場でどのような役割を担っているかを理解する。つまり、スポーツは「する人」だけで成り立っているのではなく、審判、マネージャーやトレーナーなど「支えてくれる人たち」のおかげで、プレイに専念でき、成果を残していることを理解する。そして、「みる人」も「する人」を支える重要な存在であり、「する人」「見る人」、そして「支える人」の一体的な関係がスポーツの発展に寄与することを学ぶ。科目担当教員は、ゲスト講師のコーディネーターと毎回のミニレポート及び最終回で作成する修了レポートを評価する。	
	身体表現・芸術表現論	身体表現をする、みる、かんがえることを通して、身体表現に対する理解を深める。映像や実演を用いて、演じる身体を観察、分析、評価し、ディスカッションを行い、身体表現を言葉によって表現する。ダンス・芸術スポーツ・芸術とスポーツの違いや共通点を学び、スポーツに対しての新たな理解を広げることを目指す。	
	スポーツ・運動指導者論	スポーツや運動のニーズを受け止め、集団を組織し、運営している指導者（ゲスト講師）による講義を通して、指導者の役割、使命、やりがいなどを学ぶ。そこでは、ライフステージや性別などによって、どのように指導内容や方法が異なるのか、発達を考慮した指導がどのように実践されているのかを理解する。毎回ミニレポートを作成し、途中で学生たちによるディスカッションを実施する。科目担当教員は、ゲスト講師のコーディネーターと毎回のミニレポート及び最終回で作成する修了レポートを評価する。	
	スポーツ医学A（内科系）	スポーツに関わる者には成長期のスポーツ障害から加齢による疾患まで幅広い知識が要求される。本科目では、正常な生理的機能を理解し、既にある内科系疾患の悪化を防止し、新たな障害を惹起しないように、内科疾患の発症メカニズムや病態、さらに実践に即した予防法について学ぶ。	
	スポーツ栄養学	本科目では、スポーツ選手の食事方法を学ぶ。第1段階では、食生活による生活習慣病の誘因や内外の健康づくりのための栄養施策について理解を深め、自分自身の食生活を振り返る。第2段階では、食事を摂取した後、体内の細胞で何が起きているのかを各栄養素別に学ぶ。また、食事のタイミングが、効率的に競技力向上に反映できる方法を運動時と非運動時の比較をしながら学ぶ。第3段階では、スポーツ種目・目的別の栄養摂取のあり方について学ぶ。	
コーチング科学	科学的知見を現場のコーチングに反映させることを念頭に、初心者から競技者レベルまでを対象とするスポーツの指導者にとって必要な基礎知識を学習する。具体的には①スポーツ指導者として、スポーツ医学的知識の必要性について理解する、②指導者の心構えと視点について学ぶ、③子ども、中高年、女性、障害者など、対象に合わせたスポーツ指導法を学習する、④集団、個人および時期別指導における適切な指導計画立案の方法と、その重要性について学ぶ、⑤スポーツ活動における安全管理の重要性を個人、環境、競技特性などの側面から理解する。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	特別支援教育論	障害児の就学・学籍等の問題、教育の体制・教育現場等の変革の状況を理解し、障害児教育の発展過程をたどりながら、特別支援教育の本質や原理、教育課程、各種障害と教育方法、特別支援学校、特別支援学級、通級における指導・支援を学ぶ。さらに、自立活動等についても概観する。	
	肢体不自由児教育論	本科目では、まず、「障害」の概念を確認した上で、「肢体不自由」とはどのような障害なのかを理解する。続けて、障害児教育の発展過程と今後の発展の方向性をふまえ、現在の肢体不自由児教育体系の位置付けや法制度を学ぶ。最後に、肢体不自由児教育の現代的課題のいくつかについての検討を行う。	
	スポーツバイオメカニクス	スポーツバイオメカニクスでは、さまざまな身体運動をとり上げて、力学・生理学・解剖学などの基礎知識を応用し、それら運動の仕組みを明らかにすることを目的とする。バイオメカニクスには、Kinematic（動き、フォーム）とKinetic（力、エネルギー）の2つの視点があること、またそれらの知識を駆使してヒトの運動の「巧拙」、「速さ」、「強さ」、「正確さ」、「美しさ」のなかに一定の「法則性」があることを探求する。	
	スポーツ人類学	スポーツ人類学とは何を研究し、解明しようとする学問であるかを理解する。そして、民俗フットボールを題材に、人々がどのようにスポーツを受け継ぎ、伝えてきたのか、スポーツが地域や共同体を支える文化として位置づけられ、意味づけられてきたのかを学ぶ。その中では、人類学の重要なスポーツを描く研究方法であるフィールドワークの意味や内容、有効性などについても触れる。	
	地域スポーツ論	我が国では超高齢社会を迎え、スポーツを通じた健康で幸福な社会の実現が期待されている。本科目では、こうした社会的動向の中で、スポーツが地域社会において果たしていく役割や方向性について考える。その具体例として、総合型地域スポーツクラブを取り上げ、そこでのマネジメントの視点から、スポーツによる地域づくりの方法について学習する。	共同
	武道論	日本の伝統文化である武道を代表する剣道及び柔道について、それぞれ武術から武道へと変遷していった歴史を学ぶ。日本の伝統スポーツの技術を中心とした思想と理論について基礎的な文献を紹介しながら理解する。ここでは、武道が国際化の中で、どのように変容していったのか、また国際化するとどのようなことを意味するのかについても学ぶ。	
	スポーツジェンダー論	古代オリンピックの時代から、近代スポーツが誕生した近代を経て、現代における、女性をめぐるスポーツ環境や制度について学習する。また、オリンピックにおける女性の位置づけや、日本における女性スポーツの普及・振興について学習する。さらに、ジェンダーをめぐるさまざまな問題について議論する。	
	スポーツ医学B（外科系）	スポーツに関わる者には成長期のスポーツ障害から加齢による疾患まで幅広い知識が要求される。本科目では、既にある運動器障害の悪化を防止し、新たな障害を惹起しないように、運動器の生理的機能を上肢・体幹・下肢それぞれの代表的な関節ごとに理解する。さらに外科疾患の発症メカニズムや病態、実践に即した予防法について習得し、安全かつ効果的に指導するための基礎知識を学ぶ。	
	トレーニング科学	本科目では、体力の概念を理解し、トレーニングや体力に関係する専門的な用語や知識を学ぶとともに、トレーニングの原理・原則に基づく、安全で効果的なトレーニング方法と実践方法を学ぶ。さらに、トレーニングの種類について理解を深め、それぞれのトレーニング効果の違いを学ぶ。スポーツトレーニングの指導法やトレーニング処方を作成するための力を身につける。	
	測定・評価	体力の測定・評価は、学校教育やスポーツ指導の現場、また健康づくりや介護予防の分野においても、指導対象者の体力を理解し、運動指導を効果的に行うために重要となる。体力や運動能力に関する基礎的な知識を得るとともに、その測定方法について実践し、データのまとめ方、統計処理の方法について学習する。特に新体力テストについては、年代に応じた測定方法を理解し、得られたデータの基礎的統計処理の方法について学ぶ。	
メンタルトレーニング	近年、競技場面での実力発揮をねらいとした心理スキルトレーニング（メンタルトレーニング）に対する関心が高まっている。本科目では、日本スポーツ心理学会「スポーツメンタルトレーニング指導士」資格に定められたメンタルトレーニングの理論背景と、実践内容の具体例を示し、この分野に対する理解を深める。さらに、リラクゼーション、イメージトレーニング、試合前の心理的準備といったメンタルトレーニングの中核をなす技法を学ぶ。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	知的障害児教育論	<p>本科目では、まず、知的障害および自閉症の障害特性や教育制度上の定義を確認する。次に、障害児教育の発展過程と今後の発展の方向性をふまえて、現在の知的障害児教育体系の位置付けを学ぶ。続けて、知的障害児教育の実践例を見ながら、その課題を検討する。最後に、知的障害児教育の現代的課題のいくつかについての検討を行う。</p>	
	スポーツ科学演習	<p>スポーツ科学の研究に取り組むために、人文科学・社会科学・自然科学の3つの分野の研究法を機器、用具などを用いながら学ぶ。人文および社会科学では文献研究、インタビュー・アンケートなどの調査法、自然科学では、実験法、測定法やトレーニング方法などの基礎的な研究手技を獲得する。ここでは、設定した9つの領域を3回ずつローテーションしながら学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式／全30回)</p> <p>(2 荒木雅信／3回) ・スポーツ心理学の基礎知識、実験法、及び研究手法について</p> <p>(6 城川哲也／3回) ・筋電図測定の基礎知識、実験法、及び研究手法について</p> <p>(11 竹村瑞穂／3回) ・文献研究調査法の基礎知識、実施方法、及び研究手法について</p> <p>(12 西村直記／3回) ・スポーツ生理学実験の基礎知識、実験法、及び研究手法について</p> <p>(8 佐藤久子／3回) ・介護予防運動の基礎知識、実験法、及び研究手法について</p> <p>(14 山根真紀／6回) ・健康づくり運動の基礎知識、及び実施方法について ・ゲスト講師による演習のコーディネート</p> <p>(15 安藤佳代子／3回) ・量的研究調査法の基礎知識、実施方法、及び研究手法について</p> <p>(20 千葉洋平／3回) ・質的研究調査法の基礎知識、実施方法、及び研究手法について</p> <p>(22 山本真史／3回) ・スポーツバイオメカニクスの基礎知識、実験法、及び研究手法について</p>	オムニバス方式
	スポーツコミュニケーション	<p>本科目では、スポーツ集団でのコミュニケーションの理論背景と実践内容の具体例として、チームビルディング、言語的及び非言語的コミュニケーションについて理解を深める。さらに、スポーツがコミュニケーション・スキルの獲得に果たす役割についても学ぶ。</p>	
	スポーツメディア論	<p>本科目では、まず、スポーツがマスメディアによってどう伝えられてきたか、また現在伝えられているかについて理解する。その上で、伝える側のメディアの役割や意図を検討するとともに、読者や視聴者などは、与えられた情報をどのように受け止め、スポーツを捉えていくべきか学ぶ。スポーツとメディアが密接な関係にある中で、今後のスポーツの発展のために両者の役割及び責任についても学ぶ。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	衛生・公衆衛生学	人々の健康は、社会や環境からの影響を受けている。衛生・公衆衛生学は、その対象が人間生活全般に及ぶ学問であることを理解し、健康の維持・増進を図る様々な取り組みや社会問題との関連性を学ぶ。さらに各種保険制度や法律関係にも触れ、現状と課題について理解する。	
	学校保健B（学校・救急処置）	学校における保健管理活動に関わる事項および保健教育のあり方について考究する。特に子どもたちの健康問題を環境とのかかわりの中でとらえる。実際に学校現場で行われている身体計測や歯科検診の意義と活用法について理解するとともに、薬物乱用防止教育やがん予防教育といった将来的視野に立った教育の重要性を学ぶ。あわせて救急処置の理論と実践について理解を深め、学校における保健教育のあり方を学ぶ。	
	肢体不自由児の心理	肢体不自由児といっても、そのタイプや症状はさまざまである。それを押さえたうえで、共通してみられる「こころ」の問題とはどういうことなのか、そこには「からだ」というものがどのようにかかわっているのか、ということ論じる。そして、肢体不自由児（だけでなく、最終的には障害児と呼ばれる人たちが）社会のなかでより充実した生き方ができるような指導・援助について検討する。	
	肢体不自由児の生理と病理	子どもの特徴は成長と発達にあり、おとなとはまったく異なった病態生理を示す。子どもの障害の成因がおとなのそれと大きく異なるのは、生命進化の具体的な表現である内的（遺伝的）要因と発達の各時期に特有な外的（環境）要因とが互いに連関して変化していくからである。総論において、この成長・発達のダイナミズムとその過程で生ずる病態を、各論においては脳や骨格筋障害をおこす原因となる代表的な疾患を通して、肢体不自由をきたす医学について理解を深めることができ、また、障害を固定的に捉えないで可塑性に富んでいることも理解できるようにする。	
	障害者スポーツ指導法演習A	各種の障害の概要について学習し、運動やスポーツの指導時に留意する点、日常生活において支援する内容について理解する。用具やルール、その人に合った運動技術（方法）を工夫して行うことで一見特殊に見える障害者スポーツへも参加が可能なることを理解する。スポーツの修正、改変は最小限にとどめ、参加者が最大限、能力を發揮できるようにすることを学ぶ。既存のスポーツで対応できない時には新たなスポーツを創造する必要があること、またその方法について学ぶ。これらを理解したうえで模擬指導などを通じて指導力を身につける。	
	ふくしスポーツ演習	地域で実施される高齢者、障害者、子どもを対象とした運動・スポーツプログラムを企画し、実際に関係者を招いて実施し、評価する。企画に際しては地域、参加者のニーズ、国のスポーツ施策のあり方などを考慮して目的を考え、参加者、実施場所、スタッフなどのマンパワー、予算規模に留意してプログラム内容を考え、準備するマネジメント力を身につける。プログラム運営に際しては、安全に配慮しつつ楽しい雰囲気の中で目的が達成できるよう指導力、運営力を身につける。プログラム実施後に総括を行い、改善点などを報告する力を身につける。	共同
	スポーツ政策・行政論	本科目では、スポーツ政策を担う機関の役割や意志決定の仕組みを理解し、わが国が抱えるスポーツ政策の諸問題を受け止め、その解決に向けた具体的方策を学ぶ。国と地方のスポーツ政策の関係性や各々の行政の役割のあり方について、課題解決の具体策を検討する。	
	スポーツ法学	本科目では、スポーツ法とは何か、スポーツと法律の関係等について基礎的理解を深める。スポーツ界で起きている事例として、柔道事故、体罰問題等を取り上げ、スポーツ法学がどのように対応し得るのかについて学ぶ。今後、スポーツの各分野での指導者として有益な法知識を修得する。	
	アスレティックリハビリテーション	本科目では、コーチ、スポーツ指導者、体育教師などスポーツ現場に関わるすべての人が身につけるべき、アスレティックリハビリテーションの概要と基礎を身につける。アスレティックリハビリテーションの理論と実践を学び、スポーツ傷害予防、現場での応急処置、スポーツ傷害発生後のプログラム立案についても解説する。実際の評価方法やアスレティックリハビリテーションプログラムに関しても紹介し、それぞれのスポーツ現場での実践につなげる。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	加齢学	<p>加齢と寿命について、生物・医学的側面から学ぶ。加齢の定義と測定方法、加齢研究の歴史、加齢のメカニズム、細胞レベルと個体レベルの加齢について学ぶ。加齢に伴う体力の変化について、①運動器や神経系の機能を基礎とする行動体力（筋力、瞬発力、敏捷性など）に焦点を当てた内容、②自律神経系や免疫系の機能を基礎とする防衛体力（恒常性、適応性、免疫力など）に焦点を当てた内容に分けてを行う。</p> <p>（オムニバス方式／全15回）</p> <p>（6 城川哲也／8回） 加齢学の導入、ヒトと加齢の生理学と疾患、まとめ</p> <p>（12 西村直記／7回） 加齢の測定、メカニズム、ヒトと加齢の生理学と疾患</p>	オムニバス方式
	肢体不自由児指導法	<p>学習指導要領とともに特別支援学校の授業づくりの根拠となる「個別的教育支援計画」や「個別の指導計画」を学ぶ。肢体不自由児を対象とする特別支援学校の教育課程の中核をなす「自立活動」の研究をし、個別の指導計画との関係を学ぶ。最終的には、学習指導案の書き方を学びながら模擬授業を行い、授業研究の体験をする。</p>	
	障害者スポーツ指導法演習 B	<p>知的障害児・者、発達障害児・者、重度重複障害児・者の障害特性、運動特性、指導上の留意点と指導現場の実際について理解する。各発達年齢段階における認知力の特性、運動特性について学ぶ。そして、発達年齢段階に即した運動やスポーツのプログラムを作成し、模擬指導等を通じて指導方法を身につける。また、障害のない子どもたちと行うインクルーシブ体育・スポーツ指導時の留意点を理解し、指導実践できる力を身につける。</p>	
	コンディショニング演習	<p>健康づくりのための運動の特性を理解し、対象者に応じた指導方法の理論と実際を学ぶ。具体的には有酸素運動として、ウォーキング、ジョギング、エアロビックダンスについて、またレジスタンストレーニングとして、自重、チューブ、ボールなど身近な用具を使ったトレーニングについて学ぶ。さらに指導上理解しておくべき対象者の身体的、精神的特性を学び、安全で効果的な運動指導のためのスキルを習得する。グループ単位で模擬指導を行い、学生自身が指導を体験することで、実践に即した能力を身につける。</p>	
	スポーツフィールドワークⅡ-1	<p>4年生前期に、学校、各種福祉施設、総合型地域スポーツクラブ、スポーツ少年団、企業、野外スポーツセンターや障害者スポーツセンターに一定期間出かけ、人々のスポーツ活動の実態を理解し、学生自らが、ニーズを把握し、企画・立案したプログラムを各施設における対象者（利用者等）に対して実際に指導する。あるいは、スポーツイベントに運営者としてかかわり、イベントが成り立つ仕組みや条件、スタッフの役割、現場の課題と改善方法について考える。フィールドワーク前には挨拶や謝意の表明の重要性、報告、連絡、相談の必要性などについて理解し、フィールドワーク後には総括報告を行う。学生自身で受入先を開拓して主体的に実施する。</p>	
	スポーツフィールドワークⅡ-2	<p>4年生後期に、学校、各種福祉施設、総合型地域スポーツクラブ、スポーツ少年団、企業、野外スポーツセンターや障害者スポーツセンターに一定期間出かけ、人々のスポーツ活動の実態を理解し、学生自らが、ニーズを把握し、企画・立案したプログラムを各施設における対象者（利用者等）に対して実際に指導する。あるいは、スポーツイベントに運営者としてかかわり、イベントが成り立つ仕組みや条件、スタッフの役割、現場の課題と改善方法について考える。フィールドワーク前には挨拶や謝意の表明の重要性、報告、連絡、相談の必要性などについて理解し、フィールドワーク後には総括報告を行う。学生自身で受入先を開拓して主体的に実施する。</p>	
	専門実技（ダンス）	<p>ダンスを体験・鑑賞することを通して、ダンスという身体運動に関して理解を深める。また、他のスポーツとの違いを感じながら、ダンスの特徴を理解する。異なるジャンルのダンスの体験を通して、個々の技術を高めるとともに、各ジャンルの代表的な作品の鑑賞を通してダンスを「観る」ことについても学ぶ。グループ活動を通して、集団で踊る・創作する・発表する楽しさを体験する。</p>	
	専門実技（野外運動A）	<p>野外運動の代表的なプログラムであるキャンプを教材として取り扱う。本科目は事前学習と学外集中授業で構成する。事前授業ではキャンプの目的や概要を理解するとともにキャンプを安全に実施するためのリスク管理について学ぶ。学外集中授業では、野外運動の指導者に必要な知識や技術、さらに共同生活の中で社会性を身に付けることをねらいとする。具体的なプログラムは、仲間づくりのためのイニシアティブゲーム、オリエンテーリング、トレッキング、食事コンテストを含めた野外炊事、キャンプファイヤーを行う。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	専門実技（陸上）	陸上競技における走・跳・投の各種目についての基本的理論及び基礎技術を習得する。基礎技術では、各種目の動き作りと基本動作を中心に習得する。同時に各種目の特性を理解し、トレーニングの方法も含めた指導法などについても学習する。そこには、フォームの分析や記録をすることを通した、技能向上の取り組みが含まれる。また、各種目の競技規則や審判法を習得し、学生自身が記録会を企画・運営できる力を養成する。	
	専門実技（バスケットボール）	バスケットボールの競技特性を理解し、基礎技術の習得とパフォーマンスの向上に取り組んでいく。その習得した技術をチームプレイの中で生かすために、チームメイトと協力することの重要性を認識し、オフェンスやディフェンスの戦術を学んでいく。さらに自チームや相手チームを分析することで、ゲームプランの考案から実行、個々やチームの課題解決への取り組みを実践していく。また、実際にゲームを運営するための準備や進行について学習する。	
	専門実技（器械運動）	体操競技として、跳馬、あん馬、床運動、鉄棒が行われているが、ここでは、中高の学校教育でも器械運動として実践されている「マット運動」、「跳び箱運動」を中心に器械運動（体操競技）の魅力や面白さをトップレベルの選手の動きの分析や技能の高さを体験的に理解することを通して受け止め、技を見る目も養う。そして、学んだことをもとに学生自身の技能向上に生かす。併せて、「体づくり運動」を扱い、自己の体や心をほぐし、体力を高める運動について理解を深める。具体的には、各回の授業の導入（準備運動・補強運動として）に体づくり運動を取り入れる。	
	専門実技（水泳）	水泳競技に含まれる4泳法の特性を理解し、基礎技術を習得する。また、中・高等学校保健体育科教員および一般水泳指導員として必要な実施計画の作成および実施担当能力の育成を中心に、知識・技能の開発を図るだけでなく、実践的なドリルやノウハウについて、仲間作り（教える、教えられる）を通して修得する。さらに、生涯スポーツの楽しみ方を広げるための水球やシンクロの基礎についても学ぶ。	
	専門実技（バレーボール）	球技の中でバレーボール固有の面白さに触れ、理解することができるように、基礎技術、戦術を学び、攻防を楽しむための作戦づくりに取り組む。そこでは、ネットを挟み、3回までボールに接触できる中で攻撃（三段攻撃）を組み立て、またそれを防御（レシーブ、ブロック）するというバレーボールの特性を理解し、技能の向上を図りつつ、トップレベルのプレイヤーやチームと自分（たち）との違いを受け止める。そして、ゲーム分析をもとに課題に抽出、克服に取り組む。なお、毎時間ゲームを入れ、技術や戦術の習得具合を受け止め、作戦づくりにつなげる。	
	専門実技（柔道）	柔道の技や礼法を身につけることを通して、日本の伝統文化としての意味や価値を学ぶ。まず、基本動作の習得が第一義的となるが、型や基本を繰り返す稽古に終始せず、安全に留意しながら、投げ技や固め技、そして連続技を習得し、ゲーム性を持たせて取り組む中で柔道の面白さを体験的に学ぶ。授業の中では、柔道から「JUDO」へと国際化する中で、何がどのように変化してきたかについても学ぶ。そして、有段者の技能の高さを理解する。	
	専門実技（アダブテッド・スポーツ）	アダブテッド・スポーツの面白さや魅力に触るとともに、ルールを学び、基礎技術を身につける。そこでは、障害の特性を理解し、指導者として創造性の高い指導ができるよう、多数のスポーツ体験を実施する。そして、何を工夫すれば誰もが参加でき、自分も楽しむことができるかを考え、それを実践する。	
	専門実技（サッカー）	球技の中でサッカー固有の面白さに触れ、理解することができるように、基礎技術、戦術を学び、作戦づくりに取り組む。そこでは、サッカーのトップレベルのプレイヤーと自分との違いを受け止め、そのすごさの中身を知る。そして、自分たちがどのように取り組むとサッカーを楽しむことができるかを考え、それを実践する。	
	専門実技（バドミントン）	バドミントンの特性や基礎技術、戦術を学びゲームへと発展させる。ここでは、自己のレベル、ペアのレベル、対戦相手のレベルを理解した上で分析し、作戦づくりに取り組む。そして、バドミントンの楽しみ方が、自分たちのどのような取り組み方によってできるかを考え、それを実践する。さらにはバドミントンが、生涯スポーツとなることへの理解を深め、取り組んでいく。	
専門実技（野外運動B）	本科目では冬季野外運動の代表的な種目であるアルペンスキーを教材とする。事前学習では冬季野外運動の概要を理解し、教材として取り上げるスキーの魅力と危険性、さらに雪を中心とした冬の自然環境を学ぶ。スキーの学外実習では、①スキーの基礎的な知識と技術及び初心者指導法を身につける、②冬の自然環境を理解する、③規則正しい生活をするとともに、新しい人間関係でのコミュニケーション能力を養う。これらの活動を通して安全で健康に留意した生活を送るとともに、スキーの初心者指導が可能となる能力と知識を身につける。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	専門実技（野外運動C）	本科目では、水辺野外活動の1つとしてスキndaイビングを教材として扱い、授業内容としては、プールトレーニングと海洋トレーニングで構成する。プールトレーニングでは3点セット（マスク、スノーケル、フィン）の機能を理解し、その取り扱いや使い方をマスターする。また、安全確保のための2人1組のボディシステム体制を習得し、リスクマネジメントを適切にこなすことができるようにする。海洋実習では、プールでの環境と大きく異なることを理解し、それらに適切に対応する能力を身につける。	
	専門実技（ソフトボール）	ソフトボールは、人のいないところにボールを打ち、協力して4つの塁を奪うと得点になり、一方のチームはそれを阻止する攻守交代制のゲームである。ここでは、そのソフトボール固有の面白さに触れるための技術・戦術を学び、トップレベルのソフトボール選手の技術・戦術の素晴らしさを理解する。また、打順、守備のポジションをチームで考え、一人一人の役割を遂行して自分たちのチームの力を発揮し、勝利につなげる方法を学ぶ。そして、ソフトボールの経験を通してベースボール型のスポーツの理解につなげる。	
	専門実技（テニス）	テニスの基本的な技術の反復練習から、応用練習、ゲームへと発展させる。また、テニスのマナーについて学習し、ゲームを通じルールを身につけ、テニスの基礎的な技術、戦術を習得しダブルスおよびシングルのプレイができるようにする。さらには、仲間とのコミュニケーションを深めつつ、生涯にわたってテニスを実践できるよう、「スポーツの楽しさ」を理解する。	
	専門実技（卓球）	卓球は、若年から高齢、リクリエーションからプロフェッショナルまで、様々なレベルに応じて楽しめる生涯スポーツである。そのため、レベルを上げながら卓球固有の面白さに触れ、様々な打法の基本や攻防の技術を習得することを狙う。また、国内外の戦術にも触れ、トップレベルのプレイヤーと自分との違いを受け止め、そのすごさの中身を知る。そして、卓球の楽しみ方が、自分たちのどのような取り組み方によってできるかを考え、それを実践する。卓球が、生涯スポーツとして生活習慣病予防になることの理解も深め、取り組んでいく。	
	専門実技（剣道）	剣道の基本動作や基本技を習得し、相手の構えを崩したり、しかけたりする攻防の楽しさを味わう。特に、剣道では防具を付けて行うため、まずは防具の付け方・はずし方からはじめ、構え、竹刀さばき、しかけ技、応じ技へと展開される。理合や残身といった剣道特有の考え方を実践を通して学び、日本の伝統文化の意味や価値を知る。稽古に終始せず、ゲーム性を持たせて武道の精神を受け止めながら技を決め、あるいはかわす面白さを体験する。そして、自分と有段者の違いを知り、有段者のすごさを受け止める。	
	スポーツ指導法演習（陸上）	陸上競技が走・投・跳を競う競技で多くの種目がある。その中から走種目から100m走、投種目から砲丸投げ、跳種目から走高跳を実習し、その技能を習得し、それぞれの種目の指導方法を理解する。トップレベルの技能をもつ選手の指導はどのように行われているかを学び、一方で、子どもから高齢者まで、障害のある・なし、また男女が共に学ぶことができる陸上競技指導を行うための競技会運営力などを養う。	
	スポーツ指導法演習（バスケットボール）	バスケットボールにおける指導方法の基礎を学び、幅広いニーズや年代に応じた指導力を身につける。実際の現場で起こりやすい怪我について理解し、その予防方法や事後の対応についての知識を得る。チームが目指すプレイスタイルの選択方法や、そのプレイスタイルを確立するための練習計画の作成・実施ができるようにする。さらに、ゲーム中に生じた個々やチームの課題に対して、適確な解決策を考え、具体的に指導ができる実践力を養う。	
	スポーツ指導法演習（水泳・水中運動）	水泳・水中運動の授業（クラス）を構成するにあたっては、その運動の特性を十分理解することが重要であることはいままでもない。しかし、得てして「水泳の学習=泳法技術の習得」の一点に集中する傾向にある。従って、ここでは、水泳・水中運動のとらえ方を諸外国の展開例も含めて実践し、その考え方や内容を吟味、習得する。	
スポーツ指導法演習（ダンス）	トップレベルのダンス、振付を鑑賞・分析することを通して、トップレベルのダンスのトレーニング、振付、指導はどのように行われているか学ぶ。ダンスの特徴を理解した上で、生涯スポーツ・健康増進に向けて、ダンスの要素（音楽、振付など）がふくまれたエクササイズ創作、指導を行う。一方で、子どもから高齢者まで、障害のある・なし、また男女が共に学ぶことができるダンス指導を行うための組織力・運営力を備えた実践力を養う。		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	スポーツ指導法演習（バレーボール）	主要な目標である「バレーボールの面白さについて深く理解して、初・中級者にバレーボール指導ができる」ようにするために、基礎段階から応用段階まで段階的・実践的な指導を行う。また、バレーボールを生涯スポーツとして継続的に実施することができるよう、組織力・運営力を備えた指導力を養う。	
	スポーツ指導法演習（サッカー）	サッカーのコーチングの世界で展開されている指導を踏まえて、トップレベルの技能を待つ選手の指導はどのように行われているかを学び、一方で、子どもから高齢者まで、障害のある・なし、また男女が共に学ぶことができるサッカー指導を行うための組織力・運営力を備えた実践力を養う。	
	スポーツ指導法演習（テニス）	テニスの基本的な技術、戦術を習得させ、ダブルスのプレイができるようにするための指導方法を身につける。また、ルールやマナー、テニスの歴史を踏まえた、指導プログラムの作成・実施ができるようになる。一方では、生涯スポーツとして、年齢別、性別、身体状況別に応じたコーチングや技術指導を学び、健康と運動との関わりも深めていく。これらを行うための組織力・運営力を備えた指導力を養う。	
	スポーツ指導法演習（バドミントン）	バドミントンのコーチングの基礎を学び、初心者からトップレベルまでのニーズや年代に応じたメニューを作成し、指導する。また、生涯スポーツとして、年齢別、性別、身体状況別に応じたコーチングや技術指導を学び、健康と運動との関わりも深めていく。これらを行うための組織力・運営力を備えた指導力を養う。	
	スポーツ指導法演習（卓球）	卓球の国内外で展開されているコーチングは、様々な方法がある。それらを踏まえて、競技のトップレベル（障害ある・なし）の技能を待つ選手のコーチングや技術指導は、どのように行われているかを学ぶ。一方では、生涯スポーツとして、年齢別、性別、身体状況別に応じたコーチングや技術指導を学び、健康と運動との関わりも深めていく。これらを行うための組織力・運営力を備えた指導力を養う。	
	スポーツ指導法演習（ゴルフ）	ゴルフは、老若男女を問わず誰もが取り組めるスポーツである。その特性を理解するとともに、基礎的なゴルフスイングに関する用語や技術的練習方法及び指導方法を学習する。また、ゴルフコースを安全に楽しくラウンドするために要求されるゴルフの基礎的技術とルール及びエチケットを学び、生涯スポーツとしてのゴルフの有効性について理解する。	
	スポーツ指導法演習（エアロビクス）	エアロビクスをはじめとした様々なエアロビクストレーニングの実践を通して、エアロビクスの理論と方法を学習する。有酸素運動について理解を深め、その効果を評価し、最大限に引き出す指導を学ぶ。エアロビクス運動の実践による、健康増進、体力向上、運動の習慣化など、様々な年代の今まで運動習慣のなかった人たちへの運動指導についても考える。年齢やニーズに応じたエアロビクスのプログラムを立て指導するための組織力・指導力を養う。	
	スポーツ指導法演習（レクリエーション・ニュースポーツ）	楽しく体を動かし、人とつながり、仲間づくりや集団を形成するといったレクリエーションのもつ意義を理解し、レクリエーションとして導入されているゲームや遊びの指導法を学ぶ。また、ニュースポーツとして親しまれている種目の中で、特に軽スポーツを中心にその面白さを知り、指導法を身につける。どちらも子どもから成人・高齢者までを対象にして楽しく安全に行うことを大切にしたい指導ができることをねらいとする。	
	保健体育科教育法Ⅰ（授業づくりの基礎理論）	中学校・高校の学習指導要領保健体育科において、「保健」、「体育」の目標・内容として位置づけられた各領域の学習内容について理解する。その上で、中学校・高校の現場における官製の研究指定校での実践、民間教育団体の実践を比較検討しながら、「保健」、「体育」の授業づくりについて学ぶ。そこでは、教科内容の明確化、教材選択の方法、教材開発・教材づくり、教授行為、評価という授業づくりの核となる作業への理解とその実践力を身につける。 (オムニバス方式／全15回) (5 白石龍生／4回) 保健の授業づくりのポイント (9 吉田文久／9回) 体育の授業づくりのポイント (5 白石龍生・9 吉田文久／2回) (共同) オリエンテーション まとめ	オムニバス方式 一部共同

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	保健体育科教育法Ⅱ－A（陸上・器械運動）	<p>学習指導要領に示されている運動領域のうち、陸上競技及び器械運動（体づくり運動含む）の教材的価値を確認し、それをもとに指導方法を学ぶ。陸上競技では、走・跳・投の運動の特性を理解し、タイムや記録の向上のための技術指導法を学ぶ。どちらも個人的種目ではあるが、グループ学習による授業を運営し、展開する指導方法も学ぶ。ここでは、フォームや演技を記録し、分析することにより生徒同士で「わかる」学びを組織する方法を学ぶ。器械運動では、示されているマット運動ととび箱運動を取り上げ、技の系統性をおさえた指導法や技を組み合わせさせた連続技の構成方法、その指導法を学ぶ。なお、「専門実技」及び「体育科指導法Ⅰ」を履修していることを前提にして、そこで学んだ授業づくりの理論、実技経験を教育実践につなげる学習に取り組む。</p> <p>（オムニバス方式／全15回）</p> <p>（⑦ 藤田育郎／7回） 陸上の指導方法</p> <p>（43 堤吉郎／7回） 器械運動の指導方法</p> <p>（⑦ 藤田育郎・43 堤吉郎／1回）（共同） まとめ</p>	オムニバス方式 一部共同
	保健体育科教育法Ⅱ－B（球技・水泳）	<p>学習指導要領に示されているスポーツ教材のうち、球技及び水泳の教材的価値を確認し、それをもとに指導方法を学ぶ。球技では、学習指導要領に示されているゴール型、ネット型、ベースボール型の3つの領域の個別の指導法とそれらに共通する指導法を学ぶ。水泳では、生徒に水の中で呼吸する、浮く、進むという水泳文化の楽しさ味わわせ、示されている4泳法（クロール、平泳ぎ、背泳ぎ、バタフライ）の系統的な技術指導法を学ぶ。また、集团的スポーツ、個人スポーツに関係なく、グループ学習を組織し、運営・展開する指導方法も学ぶ。さらに、ゲームやプレイを記録し、分析することで生徒に「わかる」学びを組織することを学ぶ。なお、「専門実技」及び「体育科指導法Ⅰ」を履修していることを前提にして、そこで学んだ授業づくりの理論、実技経験を教育実践につなげる学習に取り組む。</p> <p>（オムニバス方式／全15回）</p> <p>（4 合屋十四秋／7回） 水泳の指導方法</p> <p>（9 吉田文久／7回） 球技の指導方法</p> <p>（4 合屋十四秋・9 吉田文久／1回）（共同） まとめ</p>	オムニバス方式 一部共同
	保健体育科教育法Ⅱ－C（武道）	<p>学習指導要領に示されている武道領域のうち、剣道及び柔道の教材的価値を確認し、それをもとに指導方法を学ぶ。武道では、安全に最大限留意し、基本動作や基本技を楽しく学び（中学）、身に付けた技術をさらに高め、相手と勝敗を競う楽しさや喜びを味わわせる（高校）ための指導法を学ぶ。また、技の習得や試合を通して伝統文化としての武道について学ぶ。両方とも個人種目であるが、できるだけグループ学習を組織し、運営・展開する指導方法も学ぶ。そのなかでは、自他のプレイを記録・分析することで生徒に「わかる」学びを組織することにも取り組む。なお、「専門実技」及び「体育科指導法Ⅰ」を履修していることを前提にして、そこで学んだ授業づくりの理論、実技経験を教育実践につなげる学習に取り組む。</p> <p>（オムニバス方式／全15回）</p> <p>（69 植田真帆／7回） 柔道の指導方法</p> <p>（73 小田佳子／7回） 剣道の指導方法</p> <p>（69 植田真帆・73 小田佳子／1回）（共同） まとめ</p>	オムニバス方式 一部共同

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
	保健体育科教育法Ⅱ-D (ダンス・体育理論)	<p>学習指導要領に示されている領域である「ダンス」の教材的価値を確認し、その指導方法を学ぶ。また「体育理論」の授業づくりについて、模擬授業を導入して学ぶ。ダンスでは、取り扱うべき内容「創作ダンス」、「フォークダンス」、「現代的なリズムのダンス」について、グループに分かれてダンスの実践・発表・鑑賞に向け、グループ活動を行う。そこでは、ダンス発表会に向けたグループ学習の展開の仕方、発表会の運営についても触れる。体育理論では、中・高の学習指導要領に示された6項目の内容(中・高それぞれ3項目)を理解し、授業実践のための教材づくりや教授方法について、模擬授業を通して学ぶ。ここでは、教室で行う(座学としての)体育の授業の意味や価値を受け止める。なお、「専門実技」及び「保健体育科指導法Ⅰ」を履修していることを前提として、そこで学んだ授業づくりの理論、実技経験を教育実践につなげる学習に取り組む。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(9 吉田文久/7回) 体育理論の指導方法</p> <p>(18 甲斐久実代/7回) ダンスの指導方法</p> <p>(9 吉田文久・18 甲斐久実代/1回) (共同) まとめ</p>	オムニバス方式 一部共同
専 門 科 目	保健体育科教育法Ⅲ (授業づくり)	<p>「保健体育科教育法Ⅰ」、「保健体育科教育法Ⅱ」で学んだ内容をもとにして、保健体育科の授業づくりのポイントを理解した上で、中高を併せた保健分野の7領域から4領域を選択し、体育分野においては、7領域(12種目)のグループに分かれ、模擬授業を実施する。各回、50分の模擬授業の終了後、教師(指導者)役、生徒役、観察役の学生から授業の出来栄え(良かったこと・工夫されていること、問題点・課題となることなど)についてコメントを出し合い、集団で検討する。なお、体育領域については、保健体育科教育法Ⅱの担当教員と共同で指導を展開する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(5 白石龍生/6回) 保健領域のオリエンテーション 保健の授業づくりのポイント 保健領域の模擬授業</p> <p>(17 岡田雄樹/8回) 体育領域のオリエンテーション 体育の授業づくりのポイント 体育領域の模擬授業</p> <p>(5 白石龍生・17 岡田雄樹/1回) (共同) まとめ</p>	オムニバス方式 一部共同
	導入ゼミ	20名程度のゼミを単位として実施する。スポーツや健康あるいはそれに関連する様々な分野の中からテーマを選び、プレゼンテーションの方法、レジュメの書き方、レポート作成方法、および文章作成方法を学ぶ。学習テーマを選ぶ過程で運動やスポーツ、健康に関する課題について広く関心を持てるようにし、2年次以降の学習の動機づけとなるようにする。	
	スポーツフィールドワークⅠ	各種スポーツの現場(学校、各種福祉施設、総合型地域スポーツクラブ、スポーツ少年団、企業、野外スポーツセンターや障害者スポーツセンターなど)の現状やニーズを把握するとともに、ニーズに合った企画を立案、模擬指導を実施する。その後一定期間現場に赴きプログラムの見学および指導を行い、プログラム運営の実際やスタッフの役割について理解する。フィールドワーク後には総括報告を行う。20名程度のゼミを単位として学習する。	
	専門演習Ⅰ	スポーツ科学入門、スポーツ科学演習、スポーツフィールドワークⅠなどで学んだ知識と経験を活用し、学生自身の興味と関心を焦点化し、研究的思考を習得する。本科目では、学生が関心のあるテーマについて文献検索、先行文献検討を実施し研究課題を明確にするとともに20人程度のゼミ単位で各テーマについて討論し、論理的な思考を身につける。文献検索、先行研究検討、討論などを行う中で研究課題や研究方法を明確化し、研究計画書を作成する。	
	専門演習Ⅱ	専門演習Ⅰで作成した研究計画に基づき、必要な調査や実験、実践を実施する。資料・データの収集、結果を分析・考察、実践結果の総括などを行い、論文や報告書の形式にまとめる。論文や報告書にまとめた内容について口頭発表あるいはポスター発表を行う。質疑応答を通してさらにテーマの深化を図る。専門演習ⅠおよびⅡを通して、一連の研究のプロセスを習得する。学生は、専門演習Ⅰで選択した教員から継続して指導を受ける。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
外国人留学生・帰国生徒の特例科目	日本語と文化Ⅰ－１	本科目では、留学生を対象に、大学での留学生活に必要な日本語の聴解力と会話力の向上をめざす。聴解では、話し言葉の音声変化の特徴をつかみ、大学生活で出会う場面での会話や講義などの独話を聴いて要点が聴き取れるようにする。会話では、相手や状況に応じて、話し方のレベルが変えられ、適切に日本人とコミュニケーションできるようにする。あいづちなどの自然な話し方のコツについても学習する。後半では、テレビ番組も視聴する。	
	日本語と文化Ⅰ－２	本科目では、前期の「日本語と文化Ⅰ-1」に引き続き、大学での留学生活で要求される日本語の聴解力・会話力の向上をめざす。聴解では、フォーマルな独話や対談を聴き、要点が聴き取れるようにする。テレビ番組も視聴する。会話では、慣用表現を学習し、それを使って適切な会話ができるようになる。また、アンケート活動を行い、日本人とのコミュニケーションを通して日本人の考え方や日本社会への理解と関心を深めていく。アンケートの結果をレジュメにまとめ、口頭発表を行う。なお、「日本語と文化Ⅳ-2」との合同でレポート中間発表会を行い、「日本語と文化Ⅳ-2」で作成中のレポートについて本学生にも聞かせる機会を作り、学習姿勢を高める機会とする。	
	日本語と文化Ⅱ－１	本科目では、大学での専門書、レポート、論文などの説明的な文章を読みこなすことができるようにテキストを中心にいろいろな文章を読んでいく。また、いろいろな文章を書くことを通じて、日本語の表現方法を定着させていく。	
	日本語と文化Ⅱ－２	日本語と文化Ⅱ－１で学習した読解技術をさらに高めるために、引き続き読解を進めていく。また、日本語と文化Ⅱ－１で学習した文章表現を基礎にして、アカデミックな文章の作成方法を身につけます。具体的には大学の講義で提出を要求されるようなレポートの基礎的な作成方法を学ぶ。	
	日本語と文化Ⅲ－１	本科目では、大学の専門科目で要求される口頭発表能力を向上させることをめざす。まず、「口頭発表のしかた」や「レジュメの作り方」などの基本を学んだ後、「キーワード説明」、「情報伝達」という課題を行っていく。「キーワード説明」では、現代社会を知るキーワードについて調べ、レジュメを作成し、わかりやすく説明することができるようにする。「情報伝達」では、新聞記事を要約し、その内容を簡潔に伝え、自分の意見を明確に述べられるようにする。	
	日本語と文化Ⅲ－２	本科目では、前期の「日本語と文化Ⅲ－１」に引き続き、大学の専門科目で要求される口頭発表能力の向上をめざす。とくに、お互いの意見を尊重し、議論が深められるような、意見交換の進捗のしかたに重点を置く。話題（１）では、視聴したビデオの内容について意見交換を行い、意見交換のしかたについて学ぶ。話題（２）と（３）では、それぞれの話題についての様々な立場の意見記事を読み、多面的に物事を捉えられるようにする。続いて、その記事についての情報伝達を行い、意見交換を進行させる。「学生主体の問題提起」では、自分で関心のある話題を準備し、それについて情報伝達を行い、意見交換を進行させる。	
	日本語と文化Ⅳ－１	本科目では、大学でのレポート、論文などの説明的な文章を書くことができるようになること（アカデミック・ライティング）を最終目的とする。そのために、まず必要な文体、文法、書式などを学ぶ。ある程度まとまった長さの作文を書くことにも慣れる。授業ではそれらの技能を身につけるために毎回書くことを中心に行なう。	
	日本語と文化Ⅳ－２	本科目では、日本語と文化Ⅳ－１に引き続き、大学でのレポート、論文などの説明的な文章を書くこと（アカデミック・ライティング）ができるようになることを最終目的とする。前期で学習したレポートの書き方を基礎②、よりわかりやすく説得力があり、内容のある文章を書けるようになることを目指す。最終課題は2,000字～3,000字程度の自分の研究レポートの作成とその発表とする。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
自由科目	教職入門B	本科目では、教職をめざす学生に教職の魅力とは何かを伝え、教育現場の実態や教師の実践を通して学びを深める。そして、「教育とは何か」、「教師とは何か」など教育の本質を探求し、考察を深める。また、古今東西の優れた教育思想や教師像を紹介し、教職に求められる資質や実践的指導力について考え、その基礎となる力を自ら養い、教職へのモチベーションを高めることを狙いとする。	
	知的障害児の心理	知的障害の主なものに関する基礎知識を学ぶ。そのうえで、知的障害児も障害児である前に、子どもとしての“当たり前”の心をもっていることを踏まえる。“当り前の心”が障害によってどう妨げられる可能性があるのかを学び、特に親や教師が対応に困る、生活上・行動上の問題について、発生する原因と対応のあり方について考える。その際、現在取り組まれている療育方法についての基礎知識を学び、そのうえで、保育・療育・教育実践において大切にすべきことは何か学び考える。	
	視覚・聴覚・病弱児論	この授業では、視覚障害、聴覚障害、病弱の3領域について、心理・生理・病理の基礎的事項を学ぶ。それぞれ単一の障害のみをもつ子どもについてのみだけでなく、当該障害のみではなく別の障害を併せ持つ子どもについても学習する。また、いわゆる「重症心身障害」と呼ばれる非常に障害の重篤な子どもについても考える。 (オムニバス方式／全15回) (24 柏倉秀克／6回) 視覚障害児領域 まとめ (55 藤井克美／5回) 聴覚障害児領域 (83 田中賀陽子／4回) 病弱児領域	オムニバス方式
	教育原理B	教育とは何か？この問いに答えるために、本科目ではまず、教育についての基礎的考察を通して、受講者一人ひとりが自分自身と教育との関わりを認識し、人間にとってのその意味を考えることから始める。その上で、学校の存在する意味や意図的な教育プロセスの諸側面を理解することを通して、教師の果たすべき役割について学んでいく。また、教育現場及び教育行政が抱えている問題状況についても適宜取り上げ、受講生とともに考えていく。	
	教育と発達心理学B	子どもの発達を見据えた教育的な関わりを行う上で必要な知識を、発達心理学、教育心理学の知見を中心に学習していく。前半は発達心理学で明らかになっている、環境や遺伝の影響から始め、自我、身体、認知・思考、言語、社会性などの発達、そして生涯発達について学ぶ。後半では、子どもの学びに関する基礎的な知識を身に付け、子どもの個性、子ども集団との関わりや、障害のある幼児・児童・生徒の理解や支援について学んでいく。	
	教育制度論B	今日における教育、とりわけ学校教育は公教育として社会的な枠組みの中で意図的に行われているものである。本科目では、学校で教師が行う教育実践が、どのような社会的・制度的文脈の中で営まれているのか、そのあり方とありようについて法制度論的側面から解説をする。また、折に触れて、それらをめぐる葛藤状況や教育制度改革の動向にも言及し、受講生とともに考える。	
	教育課程論B	学校教育の構造をふまえながら教育課程に関する理論的知識について講じる。そのうえで、教育課程編成に関わる実践的課題を今日の動向と関連させながら検討する。また、中学校におけるカリキュラム開発と単元構想づくりをとおして、基礎的な実践力の形成をめざす。	
	教育相談の基礎と方法B	教育相談は、生徒の人格発達・成長を援助することを目的としている。そこでそれぞれの時期の人格発達上の発達課題や問題について学ぶ。そして教育相談の理論的枠組みとしてのカウンセリング理論とその技法を学習したうえで、不登校やいじめ、非行などについての理解の仕方や対応の在り方について考えていく。	
	知的障害児の生理と病理	子どもの特徴は成長と発達にあり、おとなとはまったく異なった病態生理を示す。子どもの障害の成因がおとなのそれと大きく異なるのは、生命進化の具体的な表現である内的（遺伝的）要因と発達の各時期に特有な外的（環境）要因とが互いに関連して変化していくからである。総論において、この成長・発達のダイナミズムとその過程で生ずる病態を、各論において脳障害を起こす原因となる代表的な疾患を通して、知的障害をきたす医学について理解を深めることができるよう、また、障害を固定的に捉えないで可塑性に富んでいることを理解できるよう解説する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
自由科目	道徳教育の指導法B	具体的な授業例を検討することを通して、内包する課題を明らかにするとともに、改善の方向をとらえる。また、それらの活動を通して、授業づくりに必要な力量形成の視点を明らかにする。授業実践を読みながら、どのような授業を構想するか、発表を行う。	
	教育方法論B	授業づくり、学級集団づくりに関する理論的な基本理解をはかる。そのうえで、教育実践記録、ビデオ等の資料を用いて授業づくり、子ども集団づくりの分析、グループ討論を行う。中学校における学習指導や学級集団づくりの方法を実践記録から分析・考察し、グループ発表する。	
	知的障害児指導法	本科目では、特別支援学校の教育課程編成の方法やその根拠となる学習指導要領を簡単に確認した上で、知的障害児を対象とする特別支援学校でよく行われている授業形態を学ぶ。最終的には、学習指導案の書き方を学びながら模擬授業を行い、授業研究を体験する。	
	生徒・進路指導論B	近年の子どもや教育をめぐる諸問題（「いじめ」、「荒れ・暴力」、「発達障害」、「貧困」など）を、生活指導の視点から読み解き、理解する。これらの諸問題に関する実践分析を通して、生活指導の意義と役割を理解し、それぞれの諸問題への指導方法（生徒理解の方法、問題行動への対応、進路指導など）について考える。	
	発達障害児論	LD・ADHDなどの発達障害の概要を理解する。特に彼らのパーソナリティの発達や集団の中での自己形成認知などを心理学的視点から学習する。さらに、それらの障害を持つ“子ども自身を理解する”とはどういうことかについて検討する。また、近年学校現場で課題となっている重複障害についても触れる。	
	特別支援教育課程論	特別支援教育は、4つの教育の場に分類することができ、それぞれの教育課程や指導法の特色がある。また、障害の種類や程度によっても教育課程は異なり、それぞれの特徴を学ぶ必要がある。そのような状況を理解し、個別の指導計画等を通して、一人一人の子どもたちに沿った具体的な指導法を検討するための基礎的能力を養う。	
	特別活動方法論B	学校教育における特別活動の位置とその教育的意義を明らかにする。そのために、集団づくりの実践記録を読み、具体的な事例から自治の意味を考える。学校において子どもたちは、学級・学年という集団に大きな影響を受けつつ生活している。だからからこそ集団の中で生きることの意味を考えさせる意義がある。子どもの学校生活の基礎集団である学級（ホーム）における活動の指導法や学年集団の指導法について論じる。	
	教育実習ⅠB（事前事後）	本科目は教育実習の事前事後指導である。事前指導では、教育実習に臨む際の心構え、実習ノートの記録方法、指導案の作成について学ぶ。事後指導では、実習ノートを利用して、教育実習中の反省点を明らかにし、教員としての資質形成に向けた目標をつけていく。	
	教育実習ⅡB	教育職員免許法が定める「教育実習」に相当し、中学校・高等学校一種教員免許状（保健体育）取得予定者が本科目を履修する。学生は校長と実習担当教員の指導のもと実習を行う。教育課程の内容と指導方法のほか、教育課程外の活動、学級経営、教職員としてのサービスのあり方、生徒との関わりについても総合的に理解を深める。	
	教育実習ⅢB	教育職員免許法が定める「教育実習」に相当し、高等学校一種教員免許状（保健体育）取得予定者が本科目を履修する。学生は校長と実習担当教員の指導のもと実習を行う。教育課程の内容と指導方法のほか、教育課程外の活動、学級経営、教職員としてのサービスのあり方、生徒との関わりについても総合的に理解を深める。	
	障害児教育実習Ⅰ（事前事後）	本科目は障害児教育実習の事前事後指導である。事前指導では、教育実習に臨む際の心構え、実習ノートの記録方法、指導案の作成について学ぶ。事後指導では、実習ノートを利用して、教育実習中の反省点を明らかにし、特別支援教育にかかわる教員としての資質形成に向けた目標をつけていく。	
	障害児教育実習Ⅱ	教育職員免許法が定める「心身に障害のある幼児、児童又は生徒についての教育実習」に相当し、特別支援学校教諭免許取得予定者が本科目を履修する。学生は校長と実習担当教員の指導のもと実習を行う。教育課程の内容と指導方法のほか、教職員としてのサービスのあり方、障害児との関わりについても総合的に理解を深める。	
	教職実践演習（中高）	大学4年間で学んだ専門知識や技術・技能、教育実習などの経験をもとに、教育現場で直面すると予想される諸課題に対して、講義や演習、現場調査、研究発表、討論、ロールプレイング等を組み合わせて実践的に学ぶ。現場の教育的課題に対応するために現職教員を招いて、教育課題に対して演習形式で学ぶ。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
自由科目	健康運動特論 I	本科目は、公益財団法人「健康・体力づくり事業団」が認定する健康運動指導士の資格取得に向けた科目である。専門科目で取得した健康運動指導のための知識を強化するとともに、ハイリスク者への安全で効果的な運動指導に必要となる基本的な知識を習得し、運動指導の実践につなげることをねらいとする。	
	健康運動特論 II	本科目は、公益財団法人「健康・体力づくり事業団」が認定する健康運動指導士の資格取得に向けた科目である。専門科目及び健康運動特論 I で取得した健康運動指導のための知識を踏まえ、ハイリスク者を含めた幅広い対象者に対して、安全で効果的な運動指導の方法を習得することをねらいとする。	
	ビジネススキル	本科目はオンデマンド授業（12講）と対面授業（2講）と個人面談（1講）の計15講で構成されている。オンデマンド授業では、履歴書の書き方や社会で求められるスキル、考え方を繰り返し学習できるようにしており、今後の就職活動やインターンシップ、そして働く上で必要なスキルを身に付けることができる。対面授業では、業界研究や最新の就職情報を学習し、個々人のキャリアビジョンの形成に役立てていく。個人面談では、各キャンパスのアドバイザーから履歴書の添削を受ける事によって就職活動に必要な力を養ったり、残りの学生生活を充実したものにするためのアドバイスや指導を受けたりして、今後の進路を決めていくための道筋を考えていく。	
	インターンシップ I	学生が近い将来に就職することを視野に入れて、自身の専攻分野を踏まえながら一定の期間、企業や非営利機関などの事業所において就業体験を行う。社会人として求められる知識や技能を身につけるだけでなく、職業意識の向上、希望職種とのミスマッチの防止、就職活動への円滑な移行へとつなげる。なお、本科目の履修には、インターンシップオリエンテーションへの出席と「ビジネススキル」を受講していることを条件とする。 担当教員の指導のもと、学生自身で受入先を探し、事前申請・事後申請等で5日間以上インターンシップ実習の実績を大学が確認できた場合、内容を審査の上で単位を認定する。	
	インターンシップ II	学生が近い将来に就職することを視野に入れて、自身の専攻分野を踏まえながら一定の期間、企業や非営利機関などの事業所において就業体験を行う。社会人として求められる知識や技能を身につけるだけでなく、職業意識の向上、希望職種とのミスマッチの防止、就職活動への円滑な移行へとつなげる。なお、本科目の履修には、インターンシップオリエンテーションへの出席と「ビジネススキル」を受講していることを条件とする。 担当教員の指導のもと、学生自身で受入先を探し、事前申請・事後申請等で10日間以上インターンシップ実習の実績を大学が確認できた場合、内容を審査の上で単位を認定する。	

(注)

1 開設する授業科目の数に応じ、適宜枠の数を増やして記入すること。

2 保健師・助産師・看護師学校の指定を受ける課程において、指定規則上の複数の別表の教育内容を含む科目がある場合は、備考欄にその旨を記載し、別表に定める教育内容が教授されることがわかる資料（シラバス等）を別に添付すること。